

２０２２年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

本校の教育理念	創立者福澤諭吉が唱えた「独立自尊」を教育理念とし、未来の先導者の育成を目指している。 本校は中高一貫６年制の男女共学校として1992年に開校し、横浜初等部を含めた小中高一貫校として３年目を迎える。 情操豊かで、創造力に富み、思いやりが深く、広い視野に立って物事を判断し、社会に貢献できる人、社会的責任を自覚し、知性・感性・体力にバランスのとれた教養人の育成を教育目標としている。
本校の特色	基礎を確実に身につける、きめ細かな指導を基本とし、開校以来、語学と情報リテラシー教育に力を注ぎ、「異文化交流」と「情報教育」を教育における大きな柱としている。 本校では、帰国生が中等部では約20%、高等部では約25%という高い割合を占めており、異文化の交流が自然な形で学校の中で生まれている。 二人担任制を導入し、きめ細かい生徒対応を目指している。

【２０２２年度総括】

●教科教育活動について

開校以来、各教科とも一貫校の特性を生かし、中等部は基礎的知識の習得、高等部では習得した知識を基に論理的思考や表現力を養う活動を行い、中高で継続的、発展的な教育内容になるよう配慮している。 2022年度は２つの点が特筆される。まず１点目は、横浜初等部からの卒業生が高等部に進学し、高等部入試が変更されたことである。帰国生入試は数学、国語（課題型小論文）の筆記試験のみとし、英語は、筆記試験をなくし、TOEFLiBT、IELTS、実用英語技能検定試験による資格と面接によるものとした。また、全国枠入試は書類選考と面接によるものとした。高等部から入学する生徒数が減ったが、内部進学者との融和に問題はなかったと考えられる。もう１点は、今年度も引き続き、コロナと「共存」しながら学びの質を向上させつつ、コロナ禍以前の形態に戻すべく模索を繰り返した点である。特に、音楽の歌唱に関しては２学期以降に可能となり、３学期の中等部生の４年ぶりの合唱コンクール開催につなげることができた。また、様々な見学会は現地に赴くことができるようになった。 本校では中等部の理科や家庭科、高等部の４年の数学で実施しているチームティーチング制を今年度から中等部１年生の体育で導入し、安全面に留意しつつ、きめ細かな実技指導が行なわれた。 本年度より、高等部４年生のカリキュラムが新指導要領のカリキュラムに移行した。地理総合と歴史総合が必修となり、よりグローバルな視点での授業が展開された。理科では生物基礎に加え、昨年度まで学校設置科目であった地球科学（１単位）を地学基礎（２単位）とし、先導者として必要な自然科学の授業を充実させた。また、各教科で、SDGsを意識的・積極的に授業に組み込むことは継続的に行なわれた。国語科では各学年においてSDGsの17の目標のうちいずれかの目標と関連づけられる内容を扱った。社会科地理分野では、ゴール１４（海の豊かさ）、１５（陸の豊かさ）を扱い、公民分野ではゴール５（ジェンダー平等）、１０（人や国の不平等）、１６（平和と公正）について学んだ。理科では、脱炭素化、クリーンエネルギーの学習を、ゴール７（エネルギー）、９（産業と技術革新）と関連付けた。家庭科では、「つくる責任・つかう責任」、「住み続けられるまちづくり」、「パートナーシップ」など、カリキュラム全体で、SDGsの17のゴールのすべてを１年生から６年生のカリキュラムで網羅している。間接的なSDGsの学習として、情報科では、タイピング入力練習のテキストをSDGsゴールにしたり、英語科では、speech, reading, writingのトピックに意識的にSDGs関連を選んだりした。本校の教科教育活動は、学年、教科区分ではなく、総合的に融合的に展開されていることが再認識された。
--

●委員会活動について

各委員会は、本校の教育目標が達成されるよう設置され、全ての教員が参画している。毎年各々が管轄する教育場面において生徒の安全や、教育効果を検証し評価している。 総じて、コロナ禍３年目ということで委員会の活動は感染症対策を行いつつ、可能な限り「通常」への移行を模索し続けた１年であったといえる。今年度は、３年生と６年生の行き先が変更になったものの、全学年で宿泊を伴う旅行を行なうことができた。国際交流においては、米国 Lawrenceville プログラムと英国 Perse プログラムを実施できた。文化祭については、２年間オンライン開催が続いたが、オンラインのメリットを今年度も活かしつつ、入場人数の厳格な管理を行ない、来場者を迎えて行なうことができ、６年生は、第一体育館と150番教室の広い空間を利用して全クラスが劇企画を行うことができた。芸術鑑賞会は東京オペラシティに全校生徒を集めて、オーケストラ鑑賞を行なうことができ、情操教育の一助を担うことができた。卒業生を送る会についてはθ館で対面によって開催された。クラブ活動は体連・文連ともに制約はあったが、活動を行えた。生徒側の協力もあり、クラブ発のクラスターは引き続きかなり抑えられた。ただし、コロナ禍以前からの懸案である施設不足についてはまだまだ改善の余地が残されている。広報活動に関しては、学校見学会を６回対面形式で行なうことができた。論文実習では、早稲田大学本庄高等学院との交流を再開した。コロナ禍が続いていて、生徒がマスク着用になっていたり、教員室が立ち入り禁止になっていたりして、依然として。本校の良さが発揮されない状態にあるのはもどかしい限りである。本年度は開校30年を迎え、30年記念式典が４月に行なわれ、30年誌が発行された。来年度から次の10年に向けての取り組みが始まる。コロナ禍を乗り越え、通常が取り戻され、さらなる発展をしていかなければならない。
--

●保護者からの評価について（学校関係者評価より）

2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施している。実施の方法としては本校生徒の保護者代表（世話人）の37名に、本校が実施している自己評価の方法や設置項目などに対する評価を行っていただいた。手順としては、事前にURLから学校評価報告書にアクセスしていただき、アンケートの設問に４段階評価で回答を求め、33名分を有効な回答として集計を行った。 全回答数（回答者33×設問数7）231のうち、 A（十分）が66.7%、B（おおむね十分）が30.3%、C（やや不十分）が2.6%、D（不十分）が0.4%であった。 アンケートは、評価内容に対してではなく、評価の仕組みに対するものであり、保護者を代表とする33名の評価であったが、貴重なフィードバックをいただいた。多くの方々に、コロナ禍から平常時に戻す試みに賛同が得られた。また、教科の評価において、各教科でのSDGsと関連させた取り組みについて、生徒がご家庭でもSDGsを意識して生活しているのご意見があったのに対し、全教科で無理に関連させることに疑問を感じるとのご意見もいただいた。また、各教科での評価の厳しさに温度差があるのご指摘もいただいた。さらに、学校評価報告書の認知度を高める工夫があってもよいのではないかというご意見もあった。
--

2022 年度 学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

Ⅰ. 教科における自己評価

評価方法	年度当初に各教科の学年、分野毎に授業担当教員が授業計画と目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に、授業計画の実施状況と、目標の達成度について授業担当教員が４段階で評価を行う。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）
総合評価 規定	各教科の学年、分野毎の評価を集計し、以下の計算で算出されたものを総合評価とする。 各分野と学年の評価を数字に換算 A→4 B→3 C→2 D→1 その平均を総合評価点とし、下記基準でアルファベット 4 段階とする。 A 達成できた（総合評価≧3.2）／B ある程度達成できた（総合評価≧2.4）／ C あまり達成できなかった（総合評価≧1.6）／D 達成できなかった（総合評価＜1.6）

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
国語	国語科は下記のゴールにしたがって、各学年で実践の形態を考えて教科指導を行う。「具体案」は右記「結果」に寄せることで示す。 1. あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。 3. あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する。 4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。 5. ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う。 8. 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用ディーセント・ワークを促進する。 9. 強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進・研究開発従事者数の増加を図る。 10.各国内及び各国間の不平等を是正する。 11. 包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。 14. 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。 15. 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。 16. 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。	【全学年】 年間を通じて実施した漢字テスト(4) 特に中等部では GIGA PC の活用を踏まえ、Zoom による ICT の推進(9) 【1 年】 自分の住んでいる町を紹介する説明文を書く(11) 様々な本屋を調査し、店主になったつもりでプロデュース企画案を書く(11) 中学生の制服に関する意見文を書く(1・5) 年賀状の書き方、書き初め、ポスターを書く(4) 【2 年】 「エシカルに生きよう」（末吉里花）を引用して SDGs に関する小論文を執筆する。(4・12) 作家手稿の実物を用いて創作・推敲・校正・活版印刷について主体的に学習。(4・9) あの人が残した文字、包み紙の書き方、原稿用紙の書き方、書き初め、新聞を書く(4) 【3 年】 戦争文学を扱い、道徳・総合と連携した。映画「黒い雨(井伏鱒二)」の鑑賞、作品の読解、「輝ける闇(開高健)」(10) 「隠された被爆米兵」(16) 「字のない葉書、ご飯(向田邦子)」(5) 『論語』を読み、学ぶことの意味を考える。(4) 『平家物語』より「敦盛の最期」を読み、その時代に生きた人々の苦悩に思いを寄せる。(5・16) 俳句や和歌（東歌、防人歌を含む）を読み、作者の置かれている状況や思いを感じ取る。(1・4・5・16) 短歌のグループ発表。(4・16) 季節ごとの吟行と句会の開催。(4) 【4 年】 古典から現代詩に通底するリズムを体に沁み込ませる(4) 現代文学に通底する思想について理解した(4・16) 戦時下における文学の状況について関連教材を通して理解した(16) 「グローバル化と『文脈』」（與那覇潤）「読む」（外山滋比古）「現代日本の開化」（夏目漱石）(10・16) 【5 年】 能狂言鑑賞教室(4) 夏目漱石『こころ』(4) 千々和泰明『戦争はいかに終結したか』(4) 松本雅和『平和主義とは何か』(4) 紛争解決とは何かについて論文を書く(4) 評論や「現代文キーワード読解」(1・10・16) 「史記」項羽と劉邦から人々の苦悩や戦争の悲劇を実感する。(16) 【6 年】	一見関わりのないように思える国語科の営みが、SDGs と如何に繋がってきていたか、如何に繋げていくかを、より深い所で考察し、共有しながら課程を進める。	高等部での新カリキュラムにおいて、来るべき 6 年を見据えた編成を考える。	A	A

		現代文Bでは「総合的に考える」をテーマとした授業を展開した。 SDGsに直結した授業としては、 「総合的に考える① ウクライナ情勢」(16)、 「総合的に考える② パンデミック」(3,10)、 「総合的に考える⑤ 考える人がどうか増えますようにプロジェクト」(1,3,4,5,10,16) が挙げられる。 「忍び扇の長歌(西鶴諸国ばなし)」「竹芝寺伝説(更級日記)」身分の高い女性が低い男性との愛を貫く話(5) 江戸時代には寺子屋があって識字率が高く、庶民が文学の担い手であったこと。この時代に被支配者階級の、しかも女性が本を読めたのは世界史的に見れば希有なことであることを強調した。(4) 篆刻、写経、創作(4)				
社会	中等部では地理・歴史・公民の三分野にわたり、バランスよく基礎学力を習得することで、多角的かつ幅広く社会をとらえる視点を持つことを目標とする。 高等部では、学部選択を見据えて各科目高度な専門的知識を習得するばかりでなく、習得した知識を用いてアウトプットできるようにプレゼンテーションや論述の機会を多く設ける。 特別カリキュラムの期間には史跡や企業・公的機関への見学を実施し、実際に自身の目で見ることにより、授業で習得した知識について考え、理解する機会を設ける。 同じく、様々な業種の方々から直接話を伺うプログラムを実施し、将来的なキャリアに対する意識形成も目標とする。	中等部では、1年生で地理・歴史分野を学習した。基礎的な知識の定着を狙いとするが、教科に対する意欲はあるものの、中学入試で社会を受験していない生徒を中心に苦勞をしている印象がある。 2年生の地理分野では、SDGsへの意識を高めるため、海の豊かさ・陸の豊かさについて考えるとともに、公民分野では、ジェンダー、平等や人と国の不平等について、また平和と公正について、裁判例を元に考察してきた。初等部・帰国生・一般生と、多様なバックグラウンドを持つ生徒の意見によって議論が活発化し、物事を深く考察するきっかけとなった。 3年生では、歴史・公民分野を学習した。歴史では物事の多角的な見方を身につけ、公民では日々更新される時事的な情報に常に触れることの重要性を理解できた。 高等部では、新カリキュラムの施行により、今年度から4年生で「地理総合」「歴史総合」が必修科目となった。基本的にはそれまでの地理A・日本史Aを基軸としながら、包括的なグローバルな視点での授業を実施した。 5年生では世界史B、6年生では政治・経済・倫理を従来通り実施した。より専門的な内容を学ぶことで、自らの考え方の幅を広げることができている。 特別カリキュラムでは、企業・物流見学、キャリア教育・プログラムを参加人数の制限はありながらも、コロナ禍前とほぼ同様のものを実施することができた。 自らの考えを論理的にアウトプットできる生徒を育てることができている感触を持つ一方、基礎知識の定着がなされていない。また、学年が変わると、それまでに学習した内容を関連させて習得することができていない生徒が見受けられる。	中等部では、2年生での地理→公民分野への転換の時期について引き続き検討する必要がある。また、生徒がバランスよく基礎学力を習得できるよう扱う内容についても検討を重ねたい。一方で、単なる知識の詰め込みに陥ることのないように留意し、現在有している知識からどのようなことが考えられるのか、論理的な思考力の育成も重視する必要がある。プレゼンテーションやレポート・論述問題により、その課題に取り組みたい。 高等部では、引き続き大学における「研究活動」をターゲットとし、6年生「論文実習」の履修の前に、論理的思考力をより養い、客観的論述の訓練をすることが必要になる。論理的思考力を高めるためには、一定の知識も必要であるということを意識させ、知識の定着と思考力の育成の好循環を図れるようにする。	初等部との連係の方法を模索しつつ、中高6年間のカリキュラムについて引き続き検討を行う。 中等部においては帰国生などを中心とする基礎知識の未定着に対し、どのような対策を講じるべきか、「社会科」への興味関心を惹きつつ最低限必須とする項目の選定などの検討が必要である。 「知識」の定着と「学問への入り口」への興味関心の喚起の両立が課題といえる。 高等部については2023年度から「公共」「世界史探究」が新たに始まる。2024年度に全ての学年が新カリキュラムに移行することに向けて各学年で扱う内容の再検討が必要となる。	B	B
数学	中等部の代数分野では、3年間を通じて基礎的な計算力の定着を目指すとともに関数の考え方を理解し、高校数学の土台を作ることが目標とする。幾何・確率統計分野では、数学的な美しさを発見し、データを活用することによって問題発見、問題解決力を身につけることを目標とする。中等部では、1、2年生において、一人の教員が4時間を受け持っている。 高等部の4、5年では、全員が代数・幾何・解析・確率統計の基礎を学び、幅広い知識を身につける。6年I類では、経済学などを学ぶために必要な微積分・統計を、II類では同じ分野を理工学部・医学部・薬学部への進学を視野に、より深い内容まで学ぶ。I類・II類を問わず、数学を用いて客観的に物事をとらえ、論理性をもって考えを説明できる能力を養うことを目標とする。また、データサイエンス教育の充実を図り、AI時代に活躍できる人材の育成を目指す。	2022年度はすべて対面での授業を展開することができた。また、授業担当者が濃厚接触者になった場合なども、教室への遠隔授業を行うなど、これまでのオンライン授業のノウハウを生かした対応をすることができた。 中等部生については、授業の冒頭での計算練習が定着し、授業前のよいウォーミングアップとなっている。これは、各自の理解不足や計算ミスの癖などを把握できる機会となっている。 1,2年生については、2019年度より一人の教員が4時間すべてを教えている。これにより、生徒の理解度、到達度を把握しやすくなり、個別指導に活かせるメリットを感じている。さらには、宿題の量を適切に管理できるようになるとともに、試験の科目数を減らすことによって学習への負担の軽減につながっていると感じている。 高等部については、しっかりと時間数を確保することによって、理工系学部へ進学する者はもちろんのこと、文系学部に進む者にとっても数学的な思考を身に付け、進学後に必要とされる基礎的な数学力を備えることができていると考えている。4年生は初等部1期生が進学し、入試での入学形態も異なる上に、新しい学習指導要領の下での授業展開であったが、これまでの本校での教育レベルを維持し、より数学に興味をもつ生徒が増えるよう努力した。特に、4年生の数学Iでは、1クラス約20名ずつの少人数教育が実施3年目となり、一人一人の生徒との距離が縮まり、各自の理解度や勉強への取り組み姿勢を把握しやすくなっていると感じている。 また開校以来力を入れている統計教育についても、その手応えを感じることができるようになっており、6年選択科目のデータ解析では、コンクールに参加して成果を上げている。 2022年度の1年生を対象にデジタル問題集を使用した。これにより、生徒の演習や宿題の管理、生徒へのフィードバックの向上につながったと感じているとともに、ペーパーレス化という形でSDGsへの取り組みにもつながると考えている。	2022年度の1年生では試験的にデジタル問題集の導入を行った。効果の検証の継続性を考え、2023年度は2年生でデジタル問題集を使用する。生徒の演習や宿題の管理、生徒へのフィードバックの向上を主たる目的としている。 初等部1・2期生が、4・5年生となるが、これまでの本校での教育レベルを維持し、より数学に興味をもつ生徒が増えるよう努力していきたい。 引き続き、IT機器の利用やアクティブラーニングの試験的な導入を積極的に進めていきたい。	新学習指導要領で求められる主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の継続を推進し続けたい。そして、数学的な活動を通して数学の世界と現実の世界とを行き来させ、生徒の学習への動機付けを強化なものとするよう、カリキュラムマネジメントを行っていきたい。 政府の掲げる「数理・AI・データサイエンス」人材の育成に向けての教育改革も意識し、DX社会に活躍できる人材の育成を数学的側面から推進していきたい。	B	B

理科	基礎知識の習得に加え、観察・実験の体験を通して論理的に考える「科学的な視点」を身につけることを目標とする。 中等部では、恵まれた自然環境・設備の中で数多くの観察・実験を行っている。キャンパス内の植物の観察や7つの理科室での実験を通じて本物に触れ、自然の事象や現象についての理解を深め、法則性を見出すことを目標としている。また、横浜初等部からの受け入れを機に目標達成のさらなる向上を目指し、継続して少人数教育（1、2年）を試行する。 高等部では、教養としての科学と位置づけ、物理・化学・生物・地学のすべての領域の科目を必修とし、生徒の興味や進路希望に柔軟に 대응えられるよう、選択科目を設置している。観察・実験を通じて、自分の言葉で結果・考察をまとめてレポートを作成し、理論の理解を深めることを目標としている。また最新のトピックに触れたり、大学や卒業生と連携したりすることで高度な内容にも取り組むことを目指している。	2022年度は、すべての授業を展開することができた。しかしながら、感染防止対策により器具使用や授業形態に一部制限があったため、代替となる教材を準備して実施した。 今年度の実習における留意事項 ・授業前前後の手洗い。 ・冷房・暖房を稼働、窓と扉を常時開放して換気。 ・触れなければならない共有器具や標本を使用した際は、その都度アルコール消毒。 ・接眼する可能性のあるもの（顕微鏡・望遠鏡・直視分光器・ルーペなど）の使用を極力避け、やむを得ず使用する場合は、原則として保護眼鏡を着用。 ・生徒の体液（唾液など）を材料とする実験は、原則実施せず。 <総括> 中等部では、各学年に応じたやり方で実験や観察を多く取り入れる授業を展開し、生徒の理解を深めることができた。特に1、2年では少人数教育を実施し、十分な成果が得られている。授業で取り組む課題の指導をきめ細やかに行い、提出物などのフィードバックも間をおかずにできるため、生徒によって異なる理解度・習熟度をつぶさに把握できるようになった。校外学習として、1年は新江ノ島水族館の見学、3年は国立科学博物館の見学を行った。 高等部では、例年に引き続き講義と実験をバランスよく実施し、基礎的な理論を理解させた上で、実験手法などの定着をはかることができた。また、新学習指導要領の実施にあわせて、これまで学校設置科目であった4年次の地球科学（1単位）が増単され、地学基礎（2単位）として新たにスタートを切った。校外学習として、JAXAの見学、東京大学総合研究博物館の見学を行った。感染症拡大の影響で、唾液を用いた遺伝子検査実験は見送った。 <SDGsを見据えた取り組み> 物理・化学分野： エネルギーや資源の利用に関わるものとして、脱炭素化、クリーンエネルギー、資源リサイクルなどのトピックを取り上げ、今後のあり方を考察した。 生物・地学分野： 学校周辺の自然環境調査を実施し、そのデータ分析などを通じて、地球環境の保全と利用について理解を深めた。解が何通りも存在する議題に科学的見地からどのようにアプローチしていくべきか等、問いを投げかけた。	中等部では、2023年度より1年生のみ週4時間（1分野・2分野）の少人数教育の実施となる。よりよい形の授業スタイルを模索しながら、高等部でのより深い学びにつながるカリキュラム作りを固めていく。一方、2年生ではこれまで続けてきた少人数教育が廃止になるが、引き続き細やかな指導ができるよう、授業スタイルおよび課題のフィードバックのよりよい方法を構築していく。 高等部では、2023年度に初等部2期生が入学することから、昨年度に引き続き初等部からの一貫教育、本校1年次より実施した少人数教育の成果がどのように現われるかを見極めたい。物化生地4領域すべての基礎科目を必修としたことで、自然科学の基礎をすべての生徒にむらなく身につけさせ、多様な進路選択を後押しするようなカリキュラムを展開したい。 なお、2020年度から続いている感染防止策による授業制限を受け、各学年で本来学ぶべきであった内容が、十分に扱えていない部分もある（顕微鏡操作の習熟など）。6年間の一貫教育の中で、過年度の不足分を補っていく必要がある。	中等部では、引き続き、初等部からの一貫教育を活かした授業展開を目指す。初等部での学びを経てきた者、帰国のため入学前に理科を学んでいない者、入試のため理科を手厚く学んできた者など、バックグラウンドの異なる多様な生徒を1つの集団に抱えて授業を展開する上で、知識量の差や、実験・観察に必要な技術習熟の差をいかに補っていくかが、大きな課題となっている。1年生については2019年度より継続している少人数教育の特性を活かして、個々人へのきめ細やかな指導を行うにあたり、より効果的な手法を模索していきたい。 高等部では、初等部生の入学や新学習指導要領を踏まえ、新たなカリキュラムを展開していく。大半の生徒が中高6年間の理科を一貫して本校で学ぶことになっていくので、各学年で積み上げるべき基礎をより明確化し、大学進学時の到達度を高められるような教育実践をはかりたい。	A	A
音楽	中等部は基本的な力を養うことに重点をおき、指導する。基礎的な音楽理論および音楽の歴史について学習し、音楽への理解を深める。また演奏や鑑賞を通して、音楽活動をする楽しさを感じることを目的とする。 高等部では、より専門的な音楽の理解を深めるよう促す。作曲などを通して、より深く音楽理論を理解できるようにする。また打楽器やギター演奏、西洋音楽史などを通して音楽の本質に触れることを目的とする。	今年度はコロナウイルス感染予防のため、1学期は例年行っている歌唱・リコーダーの実技が実施できず、打楽器、ギターのアンサンブルの活動を行った。 2学期以降、歌唱の授業ができることとなり、中学では合唱コンクールを行うことができた。高校ではイタリア歌曲のレッスンや声楽のアンサンブル、合唱を行うことができた。 数年ぶりに歌を歌う生徒も多かったため、体をしっかり使って声を出すことや、合唱の基礎的な指導に時間をかけて指導した。歌唱を通じて、音楽をする楽しさや、喜びを感じることができた生徒は多く、一定の成果が見られた。	来年度は、感染予防のため、まだリコーダーを使った授業ができない予定である。37名クラスの器楽の一斉授業で、指導できる楽器は限られており、ボディ・パーカッションや小太鼓などリズムの学習が中心となる。 メロディ楽器を使用しないことで、音階のしくみや音程間隔の学習が進みにくいという課題がある。 学校医と連携をとりながら、より効果的に学習ができる授業内容を再考する必要がある。	これまで、感染予防のため、どうしても座学に偏りがちになってしまっていたが、表現・理論・鑑賞の各領域のバランスの取れた編成を考える必要がある。 また、音楽理論の学習が実技に生かされると実感できるような授業を工夫する。	B	B

	身近な物や風景をモチーフとし、絵画や塑像の基本的な制作技術、またそれに伴う観察力の成長を促す。また与えられたテーマから自由に発想し、そのイメージを作品として成立させる能力を養う。 中等部段階では経験のある素材を使用し、基礎力の向上と表現の幅を広げる。 高等部では専門的な素材を使用し美術の知識を深めながら作品の成立を目指す。年代に応じて技術や素材を発展させ幅広い経験を得ながら、豊かなイメージ力と再現能力を養う。	前年度同様の新型コロナ対策をしながらの授業を行った。 その中で前年度の課題でもあった自宅での課題、授業回数が減少しても課題の完成度を上げる工夫を行った。 中等部は、ほぼ例年通りの課題をこなした。ただ1年生の自身の顔を木版画で表現する課題はマスクを外すことができないためあらかじめ自宅で撮影した顔写真を持参させた。3年生の自身の顔を立体（粘土を使用）で表現する課題は、パン、果物、野菜を立体で表現する課題に変更した。 高等部は、ほぼ例年通りの課題をこなした。 <table><tr><td>1年（6クラス）</td><td>1期 塑像（手）</td><td>2期前半 版画（顔）</td><td>2期後半・3期 水彩（風景）</td></tr><tr><td>2年（6クラス）</td><td>1期 スクラッチ</td><td>2期平面構成</td><td>3期素描（靴）</td></tr><tr><td>3年（6クラス）</td><td>1期 模写</td><td>2期 静物画</td><td>3期 塑像（静物）</td></tr><tr><td>4年（3クラス）</td><td>1期 油彩</td><td>2期 陶芸</td><td>3期 石膏デッサン</td></tr><tr><td>4年（3クラス）</td><td>1期 陶芸</td><td>2期 油彩</td><td>3期 石膏デッサン</td></tr><tr><td>5年（3クラス）</td><td>1期 シルクスクリーン</td><td>2期 陶芸</td><td>3期 細密描写</td></tr><tr><td>5年（3クラス）</td><td>1期 陶芸</td><td>2期 シルクスクリーン</td><td>3期 細密描写</td></tr><tr><td>6年</td><td>選択授業 陶芸</td><td>古典技法</td><td></td></tr></table> 陶芸では毎年大量の削りカスや失敗した粘土が出るが、本校は大型の鑿岩機1台、大型ドレン機2台を有しており、ほぼ100パーセントの再利用ができています。 また、これらの粘土の再生を授業内で生徒にも参加させることにより資源の再利用の大切さも学んでいる。	1年（6クラス）	1期 塑像（手）	2期前半 版画（顔）	2期後半・3期 水彩（風景）	2年（6クラス）	1期 スクラッチ	2期平面構成	3期素描（靴）	3年（6クラス）	1期 模写	2期 静物画	3期 塑像（静物）	4年（3クラス）	1期 油彩	2期 陶芸	3期 石膏デッサン	4年（3クラス）	1期 陶芸	2期 油彩	3期 石膏デッサン	5年（3クラス）	1期 シルクスクリーン	2期 陶芸	3期 細密描写	5年（3クラス）	1期 陶芸	2期 シルクスクリーン	3期 細密描写	6年	選択授業 陶芸	古典技法		登校時の道具の扱い（消毒等）を検討。 授業前後の手洗い・消毒が疎かになりがちであったため再確認が必要。 3教室に全ての道具を設置する予定だったが収納場所に限界があり実現できなかった。	全ての学年6クラス体制となる。 3教室をフレキシブルに活用する為、道具を各教室に配置できるよう設置場所を工夫する。 コロナ以前の状態に近い状況に備えた対策が必要。	B	B
1年（6クラス）	1期 塑像（手）	2期前半 版画（顔）	2期後半・3期 水彩（風景）																																			
2年（6クラス）	1期 スクラッチ	2期平面構成	3期素描（靴）																																			
3年（6クラス）	1期 模写	2期 静物画	3期 塑像（静物）																																			
4年（3クラス）	1期 油彩	2期 陶芸	3期 石膏デッサン																																			
4年（3クラス）	1期 陶芸	2期 油彩	3期 石膏デッサン																																			
5年（3クラス）	1期 シルクスクリーン	2期 陶芸	3期 細密描写																																			
5年（3クラス）	1期 陶芸	2期 シルクスクリーン	3期 細密描写																																			
6年	選択授業 陶芸	古典技法																																				
保健体育	体を動かす喜びを体験させ、生涯にわたって運動に親しみ取り組むきっかけとし、社会生活を営む為の基礎作りを目指す。 基礎体力の強化に加え、体のバランスや調整力を養う運動も取り入れる。 安全に対する知識・行動・判断力をつけ、周囲への配慮もできるよう、道徳教育的側面も意識しながら集団の中での態度、姿勢についても指導し、バランスのとれた教養人の育成に教科として貢献する。	今年度は全ての授業を対面で展開することが出来た。しかし昨年に引き続き、中高共に安全面、コロナ感染予防対策を最優先に、さらに熱中症対策を考慮しながら授業を実施。運動を楽しむために必要な基礎技術習得を意識し、生徒の低下した体力回復・向上にも重点を置いた。また今年度から1年生においては担当者2人体制のチームティーチングを取り入れ、より細やかな実技指導を展開することが出来た。 4年保健 現代社会と健康（健康の考え方と成り立ち、私たちの健康のすがた、生活習慣病の予防と回復、がんの原因と予防、がんの治療と回復、運動と健康、食事と健康、休養・睡眠と健康、喫煙と健康、飲酒と健康、薬物乱用と健康、精神疾患の特徴、精神疾患の予防、精神疾患からの回復、健康に関する意思決定・行動選択、健康に関する環境づくり） 6年保健 交通事故の現状と要因、運転者の資質と責任、安全な交通社会づくり 応急手当の意義とその基本、心肺蘇生法、日常的な応急手当 環境衛生活動のしくみと働き 思春期の健康、妊娠・出産と健康、性感染症、家族計画と人工妊娠中絶	安全性を確保し、感染予防対策を継続しながらも、教育効果の高い授業内容を検討し、それらを、主体的に実践出来る生徒育成が課題である。慶應義塾ならではの保健体育、健康教育にも着手していく。	次年度より5年生の実技が1単位減単され、週1回の2時間授業だけになってしまう。そのため、何を減らし、何を残していくべきかを検討していきたい。さらに様々な制約が継続されることを想定し、授業に対しての興味が失われず、体育で養われるべきものが失われないよう、授業内容を検討して行く。	B	B																																
技術	実践的・体験的な学習を通じ、知識と技術を習得させ、生活する能力と実践的な態度を育てる。1年生では、情報に関する内容、2年生では、加工分野のうち製図・木材加工を、3年生では、エネルギー変換の分野で電気について、加工分野では金属などを扱っていく。	1年生 1学期 パソコン入門 2学期 情報モラル、プログラミング入門 3学期 プログラミングでクイズを作ろう 2年生 1学期 製図学習 2学期 材料強度の学習（ペーパーブリッジコンテスト）、木材の加工・木材の加工2 3学期 3DCADでの設計、栽培学習（豆苗の育成方法） 3年生 電気分野（エコキューブラジオの製作） 1学期 夏休み 機械学習（からくりおもちゃの製作） 2学期 金属の加工（金属板の加工） 3学期 金属の加工（鋳造）	金属加工領域の内容を改訂したい。	作品保管場所の確保に苦労していて、取り組むことが出来る教材に制限が出ている。今後改善されると、より幅広い学習内容に取り組めるので、検討していきたい。	A	A																																

家庭	中等部では生活に関わる基本的な知識・技術の習得をめずす。栄養や衣服の材料、管理のしかた、子供の成長と発達、住環境の整え方などについて学び、調理実習や衣服制作など実践的な実習を行う。 高等部ではさらに資源やエネルギーの効率的な利用について考え、持続可能性を意識した生活ができることをめずす。また、子供や高齢者など様々な世代の人々についての理解を深めることを目指し、妊婦体験実習や高齢者体験実習などを行う。学んだことを実生活に生かせるように考えさせるグループワークを行う。	今年度はコロナ前とほぼ同様に実習なども実施できた。ただし、調理実習時の試食は教室で行うなどコロナ対策に腐心した。2年生の被服製作実習はTT(チーム・ティーチング)の効果により、理解度と完成度が高く、生徒の取り組みも熱心であった。 家庭科では従来からSDGsを意識した教育を行ってきた。1、4年では食品ロスやゴミ問題などを食生活分野と併せて積極的に扱っており、ゴール2(飢餓)、6(安全な水)、7(エネルギー)、9(産業と技術革新)、10(人や国の不平等)、11(住み続けられるまち)、12(つくる責任・つかう責任)、13(気候変動)、14(海の豊かさ)、15(陸の豊かさ)、17(パートナーシップ)に根ざした教育を行っている。3、5年では消費生活を取り上げることににより、特にゴール12(つくる責任・つかう責任)について考え、また、5年のおもちゃ製作実習は家庭にある不要品を用いることにより、持続可能な社会作りに直結する総合的な取り組みとなっている。高等部の授業ではジェンダーや働き方、格差や経済についてもグローバルな視点で扱い、ゴール1(貧困)、2(飢餓)、3(健康と福祉)、4(質の高い教育)、5(ジェンダー平等)、6(安全な水)、8(働きがいと経済成長)、9(産業と技術革新)、10(人や国の不平等)、12(つくる責任・つかう責任)、16(平和と公正)、17(パートナーシップ)に根ざした教育を行っている。5、6年生では、妊婦体験・高齢者疑似体験により、他者への関心、理解や思いやりを育み、パートナーシップを身に付け、よりよい社会の構築に役立つ人材作りに貢献している。6年生では住生活について学び、住み続けられるまちづくりについても考えさせる内容となっている。 これまでに施設面の改善もだいたい進めることができた。今後は被服室の雨天時の換気問題を解決するための工夫をしたい。また、調理室の食器棚の改修もし、安全かつ機能的に実習ができるようにしたい。	まだしばらくはコロナ対策に気を遣う必要がありそうである。引き続き、用具の消毒、作業や試食時の注意を徹底し、通常通りの実習機会を確保したい。 調理実習でアレルギーを発症するケースがあった。事前に確認しているが、誤って皮膚についたり、自己判断で勝手に口にしたりということが1年生では起こるため、1年生の調理実習では補助教員が必要と思われる。	被服室が新設され、授業が行いやすくなった面もあるが、実習をするには狭く、アイロン作業は廊下で行わざるを得ないのが悩みである。また、雨の日は窓が開けられず、換気が悪くなるため、改善が必要である。次は調理室も食器棚を改修し、安全に効果的な授業が実施できるようにしたい。 被服実習のTTは申請が通らなかったが、効果絶大なので実施できる道を探りたい。 調理実習の食材調達の負担が大きく、ここ数年苦慮している。購入や支払いについては監理室や事務室の負担も大きく、よりよい方法を考える必要がある。	A	A
	中等部では、基本的なコンピュータの使い方(タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーションの資料作成)やクラウドを利用した課題確認・提出作業、プレゼンテーションやポスターセッションを通して、発表のスキルなどを身に付けさせる。また、マインドストームを利用したプログラミングを通して、センサーの仕組みや身の回りにあるプログラムによって制御されているものに興味を持たせた後、言語によるプログラミングにも取り組む。プログラム体験時には、フローチャートを書くことで、順序・手順を考えながら作業を行う大切さを理解させる。 高等部では、各自が企画から撮影、編集まで実施するCM制作や、企画から、文章作成、写真撮影、編集、校正まで実施する雑誌記事制作を通して、物事を表現する手法の幅を広げるとともに、物事を発信する力、人に伝わるものの作成方法を身につけさせる。また、プログラミング作業を通じて、論理的思考を養い、そして情報のデジタル化、情報デザイン、知的財産、著作権、個人情報、ビッグデータなどをキーワードとしながら、情報化が社会に及ぼす影響について理解を深める。 情報モラルについては、中等部・高等部ともに状況や学齢に合わせて定期的に呼びかけ、考える機会を設ける。 クラウドの利用に関しては、中等部・高等部ともに積極的に利用する。	2022年度は、対面授業の際は、共用パソコンを使用するため、昨年度と同様の新型コロナウイルス感染症対策を取りながら授業を行った。 中等部1年生には、4月初回の授業でGIGAスクール構想を活用して導入した端末を1人1台配布した。4～5月で1年生全員が自宅でも学校でも安心して端末を活用できるようになるための授業を行い、いつでもオンライン授業に切り替わっても大丈夫なような対策をとった。 中等部2年生全員が2週に1回のペースで取り組んでいる5分間文書入力のサンプル文章に、SDGsの「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を取り上げ、17の目標を読む機会を設けた。 「目標と具体案」に記載した教科の授業を通して身に付けさせたい事柄については、学年に応じたスキル知識が身につけていると感じている。また、授業で得た知識をもとに、他教科、委員会活動、クラブ活動、学級活動等で積極的に上手に利用することができていた。	GIGAスクール構想による1人1台端末配布によって、ICT活用スキルや知識の異なる生徒が多く入学してくることが想定される。入学してくる生徒の実態に合わせたカリキュラムを考えながら授業を行っていく必要がある。 対面で授業できる形態が望ましいが、今後、オンライン授業をすることになっても対応できるスキルや知識が身に付けられる内容も盛り込みながら授業を実施していきたい。	発展し続けている情報技術・情報社会の実情、入学してくる生徒たちのICT活用スキルの実態に合わせて、内容を常に変えていく必要がある。 校内でICT機器活用する環境(場所・施設・机・椅子など)にも目を向け、生徒がICT機器を用いやすい環境整備も行っていきたい。	A	A

英語 (α)	Our overall aim is to graduate knowledgeable, responsible, confident and globally-minded communicators who are motivated to continue their English-learning journeys and to make a meaningful contribution to society. Specific aims for Writing and Grammar: Students will become proficient writers of both academic and creative essays, culminating in a 2000-word research paper written in the 6th Year. Particular attention will be paid to academic writing conventions such as citations, referencing and the need to avoid plagiarism. Specific aims for Reading and Vocabulary: Students will improve their vocabulary knowledge and refine their reading skills by studying a variety of novels and non-fiction works typically read by students of the same age in English-speaking countries. Sixth year students will study Shakespeare. Specific aims for Speaking and Listening: Students will become confident English speakers. They will be able to make professional presentations and participate in debates on increasingly complex subjects. Sixth year students will participate in the Model United Nations, deepening their understanding of international issues.	Although school life has almost returned to normal after the disruption caused by the Covid-19 pandemic, we have found that the ICT skills acquired by both teachers and students last year have had a lasting influence, and many of our teachers are continuing to take advantage of the capabilities of Google Classroom to blend in-class and at-home learning in a more coherent way. Some examples include: 1) Sending messages and setting tasks for individual students who have had to stay at home due to Covid-19 2) Asking students to upload recordings of speeches done at home during longer holiday periods 3) Using Google Docs to facilitate the editing and redrafting of essays 4) Conducting hybrid Zoom/in-class when large numbers of students are absent due to Covid 19 Content and Language Integrated Learning (CLIL) has always been a characteristic of the Alpha English curriculum at SFC, and as one of our central aims is to graduate globally-minded, responsible students, there has always been a focus on studying global issues in a way that encourages our students to think critically about the issues that they will face as members of Society 5.0. In recent years, the SDGs have proved to be a useful framework for this purpose, and the following are examples of work done by Alpha students that focuses on the SDGs: 1) Year 1 SLWG. Speech topics focused on Goal 3 (Good Health and Well-Being), 4 (Quality of Education) and 13 (Climate Action). In addition, several TED Talks that focused on topics related to the SDGs were studied, e.g. the talk by UN Patron of the Oceans, Lewis Pugh, which focused on Goal 14 (Life Below Water). 2) Year 3 RV. Goals 16 (Peace, Justice and Strong Institutions), 5 (Gender Equality) 4 (Quality of Education) and 8 (Decent Work & Economic Growth) were addressed in the study of the novel <i>To Kill a Mockingbird</i> by Harper Lee. 3) Year 4 SL. Students gave persuasive speeches in which they had to choose a problem that fell under the SDGs, propose a solution, and persuade their audience to take action on it. 4) Year 4 RV. Goals 1 (No Poverty), 3 (Good Health and well-Being), 4 (Quality Education), 5 (Gender Equality), 8 (Decent Work and Economic Growth), 10 (Reduced Inequality), 16 (Peace Justice and Strong Institutions) were frequently discussed during our study of the 2 novels <i>Fahrenheit 451</i> by Ray Bradbury, <i>Klara and the Sun</i> by Kazuo Ishiguro, and play <i>R.U.R.</i> by Karl Capek. 5) Year 6 MUN. Students play the role of UN ambassadors for the duration of the course. The SDGs are studied in detail, and students make presentations focusing on which of the Goals are most relevant to the countries they are representing. We also discuss the SDGs in the context of Japan, and students are asked to write short essays in which they discuss which Goals they feel Japan is doing well and not so well on. Finally, the course concludes with an in-school conference in which all members of Year 6 Alpha work together to write a mock UN resolution on a global topic of concern. This year the topic was <i>Universal Secondary Education for All</i>, and Goal 4 (Quality of Education) was a major focus of the day. 6) Year 6 Discussion and Debate elective class. Each debate is based on a theme, many of which are directly linked to the SDGs, with debaters often making reference to the SDGs in order to strengthen their arguments. Some examples include: Goal 1 (No Poverty) <i>THBT the government should give more medical and financial support to the elderly</i> Goal 5 (Gender Equality) <i>THW make companies hire as many women as men.</i> Goal 7 (Affordable and Clean Energy) <i>THBT all cars should be changed to electric cars.</i> As we find every year, the majority of graduating Alpha students have reached the desired level of English. This is confirmed by the results of external exams such as TOEFL and contests such as the Keio Academic Writing Contest and a variety of speech contests. In recent years, a growing number of students are enrolling in the PEARL, Double Degree and GIGA programs at Keio University, enabling them to further develop their foreign language skills.	The Alpha curriculum is under continuous review and we are constantly looking for new materials to enrich the learning experience of our students. Particular areas of focus for 2023-24 will be: a) To focus on grammatical accuracy in the written work of the weaker Alpha students. b) To ensure that we continue to make the best use of ICT and online learning platforms to complement what takes place in school, whilst being aware of the challenges posed by technology "assisting" students with homework. c) To further raise awareness of the real-world issues that our students will face in the future.	The arrival of the first cohort of Keio Yokohama Shotobu students in 2019 brought with it a number of challenges and opportunities for the English department. We now feel we have successfully implemented a challenging and coherent curriculum at the junior high level that addresses the needs of our highly diverse student intake. The first cohort of Shotobu students moved up to senior high school in April 2023, so our medium-term aim is to ensure that an equally challenging and coherent curriculum is developed to suit their needs. To this end, Year 4 WG students completed a course survey, the results of which confirmed that the course content follows on well from junior high school courses and addresses student needs well.	A	A
	中等部、高等部共に英語はコミュニケーションの道具であるという基本理念に基づき、英語での情報を理解する Receptive な言語能力と、また英語で自分の考えを発信していく Productive な言語能力をバランス良く育て、英語を実践的に使うことができる人を育てることを目標としている。6年修了時に英検準1級、CEFR B1 レベルの言語運用能力に到達することを目指す。	2020 年度に余儀なく経験したオンライン授業、2021 年度のオンラインと対面のハイブリット授業を経て、今年度は対面授業を全面的に実施することができた。Google Classroom は課題の配信や提出のツールとして継続利用している。 中等部では従来通り、副教材である New Treasure を用いて基礎的な英文法の学習を進めた。英作文ができることを目標に基本本文の暗唱や文法問題のドリルを繰り返し行うことによって、基礎的な英語力がしっかり身につくよう、多様なトレーニングタスクを実施した。感染予防の観点から、発音練習やペア・グループワークを授業中に十分にすることができなかったため、音声教材を Google Classroom で提供し、各自自分のペースで発音練習やリスニングを繰り返し行うように指導した。また、Oxford Reading Club というオンライン多読システムを昨年に引き続き利用し、対面授業の内容と絡めることで生徒に自発的な読書を促すことができた。	コロナ禍の2年間で、対面授業とオンライン授業のハイブリッドに新しい学習の可能性を見出したが、今後もポストコロナの学び方として研究していく必要がある。 日々の授業に関しては、日本人の教員と Native の教員が引き続き密に連携を取り、必要に応じてお互いに授業内容を補い合って、学習内容	家庭学習時間が不足している生徒への課題の出し方、予習復習の仕方、self-study habit をつけさせる工夫が必要だと思われる。 副教材として使用している New Treasure シリーズを、1～4年で、より効果的に教材を活用する方法を引き続き考えていく必要がある。		

	中等部では、3年間で文科省が定める文法事項に加えて、副教材である New Treasure で扱われている発展的な文法事項の学習も進め、さらに、学習した文法事項を発展的に用いた様々な実用的表現、基本的な語彙を身につけることを目標とする。3年次には学校紹介ビデオを作成するグループプロジェクトや、身近な話題に関するプレゼンテーションを経験する。 中等部入学時の多岐に渡る学習歴及び習熟度に応じてより効果的な授業を行うために、1年、2年では2クラス合同4分割（α1クラス、β2クラス、γ1クラス）の授業展開とする。3年では2クラス合同3分割（α1クラス、β2クラス）の授業展開とする。 高等部では英語で情報を発信していくことにさらに重点を置き、4年で Speech、5年で Debate、6年で Discussion や Presentation を実施している。原書や英語でのニュースなどを教材として扱うことで、できるだけ実践的な英語力を高められるように工夫している。英語で情報を読み取り、それらを土台として自分の意見を書いていく Academic Writing の能力を高める取り組みも行っている。	高等部ではより多様な状況における日常会話での英語（海外留学の際に使う英語表現など）、及びよりフォーマルでアカデミックな英語に触れ、Listening や Reading 能力の向上させることができた。また同時に Listening や Reading のタスクを通して得た情報に基づいて、数多くのテーマについてのプレゼンテーションや、ジャーナルライティングに取り組んだ。 特に Reading の授業では、教科書の題材のみならず、原書や新聞記事などを題材にすることで、一般的な教科書には出てこないような実用的な英語表現に触れたり、語彙力を強化したりすることができた。また、5, 6年で行われる Academic Writing では、英語で他者の意見の要約を書く力や、他者の意見を取り入れながら、自分の意見を説得力ある形で表現していく力を養うことができた。 SDGs を見据えた取り組みとしては、そもそも教科書の題材が SDGs に関する素材ばかりなので、生徒は常に SDGs を意識して英語学習を進めていると言える。 英検や TOEFL などの資格・運用能力試験に特化した授業を行っているわけではないが、βの生徒であっても、卒業時までには準1級を取得する生徒の割合は30%を超えるまでになっている。	の更なる定着を図っていく必要がある。 中等部3年でのβ、γの合流に関しては、大半の生徒にとっては特に問題が生じないことがわかったが、成績下位者に対するフォローアップの方法とタイミングを考えていく必要がある。 高等部では既習の語彙、文法事項を使って Speech、Debate、Discussion、Presentation、Academic writing などを行い、自分の意見を発信していく能力を高めることももちろん大切だが、意味を優先するあまりに生じる文法的誤りを、見過ごしたままにせず、文法的正確さを高めていくための取り組みを、本格的に行うこともまた重要である。 ICT やオンライン学習プラットフォームは今後も活用していく。しかし、ごく最近、生徒が課題作成時にテクノロジーに依存する傾向が見え始め、今後より深刻になる課題であると認識している。	高等部の生徒については、ITP-TOEFL を毎年実施しているが、国際基準の英語能力テストである iBT TOEFL は、試験内容が ITP-TOEFL とは大きく異なっている。将来的には iBT TOEFL が要求する統合的言語スキルをさらに高めることができるように、高等部の英語カリキュラムを再構築していくことが求められる。 New Treasure を使い始めて4年目という節目を迎えたので、中等部各学年の Can-do リストを作成し、SFC 独自の新たなカリキュラムと評価基準を打ち出す必要がある。		
--	---	---	---	--	--	--

2022年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

2. 各委員会における自己評価

評価方法	当該年度の始業までに、運営計画と、3～5項目の目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に計画の実施状況と、各目標項目の達成度について各委員会の構成教員が、A～Dの4段階で評価する。						
総合評価	目標項目における評価点の平均点を算出し、以下の基準でアルファベット表記をする。						
規定	A達成できた（80%～100%）／Bある程度達成できた（60%～79%）／Cあまり達成できなかった（40%～59%）／D達成できなかった（～39%）						
委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	今回評価
生徒係	1. 気品の泉源・知徳の模範となる塾生の育成 2. 自宅外通学者の生活指導 3. 防災意識の向上・災害時に生徒自身が的確に対応できる知識の習得・交通安全意識の向上 4. 防犯意識の向上・情報機器・スマートフォンの適切な活用法の習得 5. 生徒の成長に合わせた保健講演会の実施 6. 生徒の学校生活全般にわたる支援	1. 生徒の公共交通機関利用時のマナー・規範意識の向上 2. 一人暮らしの会の実施・各寮との連携 3. 防災訓練の実施（帰宅方面別の設定／地震火災を想定した訓練） 4. 防犯講演会の実施／学年に応じたスマートフォン利用の仕方の徹底 5. 保健講演会の実施（精神保健・スポーツ障害など） 6. 私物管理の徹底	1. 教員が年間複数回、湘南台駅および大学本館前にてバス乗車指導に取り組んだ。本校生徒の整列マナーは向上していると感じられるが、乗車マナーに対する苦情も寄せられ、その都度全体への注意喚起を行った。 2. 生活上の具体的な問題点や解決法などを上級生から下級生に情報提供する場を設けることができた。 3. 方面別帰宅グループの確認および火災発生を想定した訓練を行った。 4. 自転車通学者に対する交通ルールの遵守およびヘルメット着用について周知した。 5. 校医・カウンセラーなどによる講演会を複数回、実施した。 6. 落とし物の展示を学期に1回のペースで実施。	1. 乗車マナー、待機時のマナーを周知し、円滑なバス通学になるよう検討を続ける。 2. 寮・学校間の連携を密にし、寮からの情報を生徒係・担任団と共有する。次年度も一人暮らしの会を実施する。 3. 次年度も帰宅方面別グループ分け、災害時を想定した避難訓練を実施する。 4. 財布・スマートフォン等の貴重品のロッカー管理を徹底していく。 5. 次年度もオンラインを併用した形での展開を検討したい。 6. 生徒会と連携し、持ち主が現れなかった落とし物の処理を検討していく。 7. 不審者情報や落とし物の情報についてclassroom等を通じて生徒たちに周知する方法を検討していく。	1. 生徒がキャンパスと駅の間を快適に通学できるような輸送システムを確立する。 2. 生徒の精神衛生面における支援のため、学校と家庭がより連携し生徒を見守る体制づくりを模索する。	B	B
いじめ防止対策推進室	1. いじめの未然防止のための措置を講じる。 2. いじめの早期発見のための措置を講じる。 3. いじめの早期解決のための措置を講じる。	1. 学校生活、友人関係にまつわる悩みなどのカウンセリング件数の増加に伴い、カウンセラーの相談時間枠の増加に加え、ステイホーム中から現在においても、電話やweb会議システムを用いた遠隔カウンセリングなどを通じて、防止のための対策を実施した。 2. 学級活動、生徒会活動、道徳の授業やクラブ活動の場において、いじめについて生徒が主体的に考え行動する機会を設けるように努め、道徳性を育む取り組みを進める。 3. 教職員は日常的にいじめの問題に触れ、「いじめは絶対に許されない行為である」という雰囲気醸成するように努めるとともに、「いじめはどの学校でも、どの生徒にも起こりうる問題である」という認識の下、生徒の行動に目を配るとともに、生徒との信頼関係の構築に努める。また、個人面談を実施するなど、生徒がいじめを訴えやすい体制を整える。 4. 表面化しにくいインターネット上のいじめへの対応策として、情報モラルを身に付けさせる指導を継続的に行うと共に、保護者と緊密に連携・協力し、双方で指導を行う。 5. 生徒がいじめを受けていると思われるときは、直ちに本推進室の会議を緊急開催して情報を共有するとともに対策を講じることにする。いじめを受けた生徒を守り、安心・安全な学校生活を送ることができるよう必要な支援を行う。いじめを受けた側、行なった側双方の生徒および保護者に対し、事実関係を速やかに伝え、適切な対応が行えるよう、保護者の協力を求めると共に、継続的な支援を行う。 6. 一貫教育校いじめ問題連絡会に出席し、塾内一貫校との情報交換・意見交換を通じ、いじめの問題に対して、適切および迅速に取り組む体制を整える。	1. 今年度内にいじめに相当する事案は発生しなかったと認識している。引き続き心を痛める生徒がでないよう最大限の防止策を講じるとともに、いじめの兆候を早期にキャッチできるよう努めていく。 2. いじめ発生時の対応フローを全教員に周知した。	中高併せて36クラスと学校規模は大きいですが、一人一人の生徒の様子を丁寧に観察する姿勢を堅持するとともに、いじめ事案が発生しなかったことに安心感を抱くことなく、緊張感を持続していくよう、教員集団に促していく。	いじめの形態は社会背景に影響を受けて変化することから、教職員が継続的に研修を行なう制度作りが求められる。また、教職員のコミュニケーションをより緊密にとれる体制を整えていく必要があると考えている。	A	A

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
文化祭	本校の文化祭の目的は、文化系クラブ・クラス・有志団体・教科が企画を行うことにより、「学校内での交流を深めるとともにその活性化を促す」こと、「本校の校風、活動状況を内外へ紹介する」ことである。また、本校の文化祭は、「文化の薫り」を基盤とし、テーマに基づく統一性のあるものを創り上げ、本校生徒や来場者の方々に我が校の「薫り」を感じてもらうことを目指す。2022年度文化祭実行委員会は、これら文化祭の目的を具現化すべく、以下を目標とした活動を行う。 1.引き続き、感染症対策を最重点事項とする。 2.オンライン文化祭が2年続き、通常の文化祭を経験している生徒が少なくなってきた。文化祭実行委員会においても、中心となって文化祭を運営したことのある生徒が在籍するのは、2022年度が最後である。これまでの経験を引き継いでいくことを、重点事項の一つとする。 3.生徒達がオフライン・オンライン双方の強みを活かした柔軟な発想で取り組むことができるよう援助し、本校文化祭が生徒の文化活動を推進することを目指す。 4.編集・配信を担当する生徒の負担軽減に引き続き留意する。 5.本校文化祭の目標を達成すべく、状況に応じた文化祭形態を考案する。 6.文化祭が、全校生徒の持つ創造力・表現力の素地へと働きかける機会となることを目標に、以下の実行委員会活動を補佐する。 ・文化祭の運営、管理をはじめ、規則の取り決め、出展企画の活動の統括を行う。 ・クラブ、クラス、有志、教員による各出展企画の、調整および支援を行う。	1-1.5.2022年度は、学校開催をベースとした形態を想定して準備を開始し、感染症の状況に応じ、在校生のみ、在校生および保護者、加えて受験生及びその保護者の三段階のいずれかをとる。いずれの段階をとるにしても、十全な感染症対策を最優先事項とする。 1-2. 5.感染症対策として、以下を行う。 ・来場者数と滞在時間を調整する。 ・教室を使用する企画には、常時換気と風通りのよい設計の徹底、通常授業時以下の活動内容および対人距離の設定等の工夫を促す。 ・ステージ企画には、公演形態・公演時間・観客人数等について、感染防止を目的とした工夫を促す。 2.オンライン文化祭が続いたため、通常の文化祭を経験したことのある生徒は、全生徒の4割に満たない。実行委員会においても、通常文化祭の運営を記憶している者はごくわずかである。本校文化祭の伝統を絶やさず引き継ぐべく、過去の資料の整理と、Googleドライブ、Googleクラスルームなどを用いた積極的な情報共有を行う。 2.3.過去の文化祭の記録写真を閲覧できるようにし、企画立案時の発想サポート、校舎使用上の技術継承を目指す。 4.5.一般来場者の人数を大きく制限または来場不可とせざるをえない年度であるため、オンラインでも文化祭の様子の一部を外部に向けて発信する。生徒の負担が増えない方法を検討する。 6-1.生徒の文化活動を活性化すべく、且つ、各企画団体の希望実現を目指し、実行委員会は企画設計および実施への助言を行う。低学年に対しては特に継続的支援を行う。 6-2.生徒の文化活動を活性化すべく、アカデミックな活動を行う有志企画の出展を補佐する。 6-3.文化祭実行委員会企画にて、文化祭出展企画外の有志生徒文化活動発表を行い、校内生徒の文化活動を活性化するきっかけとする。 6-4.文化祭実行委員会企画にて各企画を紹介することにより、学内文化交流の深化を促す。 6-5.オンライン一般公開における個人情報漏洩を回避する。 6-6.文化祭担当教員と実行委員生徒は綿密な連携をとり、担当教員はこれまでの実行委員会のノウハウの伝達を、生徒はより活性化および合理化したシステムの構築を行う。	1-1. 2022年度は、校舎を会場とし、来場者を制限した文化祭を開催した。全学年全クラス・ほとんどの文連クラブ・複数の教員企画・有志企画が出展した。 1-2.校舎内の人数を細かく計算し、以下の感染症対策をとった。 【校舎内の人数について】 ・1年生は、11/12（土）のみの参加とした。 ・在校生保護者には、入場券（2時間30分の入替制）を生徒1名あたり2枚配布した。入場券配布にあたっては、事前に行ったステージ公演抽選結果を確認し、公演当選保護者については、該当する時間帯の文化祭入場券を割り当てた。6年生については、各クラス劇の公演時間を考慮し、学年内で振り分けを工夫した。 ・一般来場者については、1,500名（申込先着順、2時間30分の入替制）を募集した。 11/12（土）受験生枠：500名 11/13（日）受験生枠：600名 一般枠：400名 受験生枠の募集にはmirai-compassシステムを使用し、一般枠募集には文化祭担当教員が作成したGoogleフォームを用いた。 ・初等部生については、最大232名（6年生希望者＋保護者1名まで＋初等部教員最大16名、1時間30分の入替制）を募集した。調整と入場者名簿の作成は初等部に依頼した。 【教室企画について】 ・例年通り、15分以内に収まる企画とした。 ・教室に一度に入れる最大人数を、スタッフと客を含め、既存棟20名、南校舎30名とした。 ・ドアおよび窓の常時開放・全面開放を徹底した。扇風機も常時稼働し、換気に努めた。南校舎廊下では大型扇風機を稼働させた。 ・各教室に設置されてあるCO2センサーが鳴った際は企画を中断し来場者を部屋から退室させ、直ちに換気を行うこととした。 ・教室内にスタッフルームを設営することを禁止した。	1.状況に応じた感染症対策をとる。 2.これまでの経験を引き継いでいくことを、引き続き重点事項の一つとする。 3.生徒達がオフライン・オンライン双方の強みを活かした柔軟な発想で企画立案および制作に取り組むことで、本校文化祭が生徒のより一層の文化活動活性化を推進することを目指す。	1.本校文化祭の目標を達成すべく、状況に応じた文化祭形態を考案する。 2.文化祭が、全校生徒の持つ創造力・表現力の素地へと働きかける機会となることを目標に、実行委員会の活動を補佐する。	B	B

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
			【6年生劇企画について】 ・上記教室企画の制限内では劇企画が成立不可能であったため、感染防止を目的に公演会場を第1体育館半面（4クラス）および150番教室（午後のみ2クラス）とし、入替制をとった。 ・公演時間以外は常時大型扇風機を稼働させた。 【ステージ公演について】 ・事前抽選による指定席制とした。 ・座席間を広くとり、観客席からの発声は禁止とした。 ・公演時間以外は常時大型扇風機を稼働させた。 【受付について】 ・感染防止対策として、バスおよび入場受付が混雑せぬよう、入場時刻の細かな振り分けを行った。 ・入場待ち列の整理および間隔を空けての誘導を行い、来場者の感染防止に努めた。検温および手指消毒も徹底した。 ・一般来場者受付は、来場者との対話と申込内容の確認が必要であるため、2022年度は教員が行った。 ・感染防止のため、例年のように実行委員会受付生徒が多くの来場者と対話することは避けた。 ・在校生保護者には、事前に配布した入場券（入場時間帯ごとに色分け）を提示していただき、胸章フォルダーに入れていただいた。胸章を持っていない保護者には保護者シール（入場時間帯ごとに色分け）を貼っていただいた。 ・一般来場者には、学校見学会と同様、受付済の書式を印刷して持参いただき、入場時に、時間帯ごとに色分けしたカラーシールをマスクの上部（耳の脇）に貼っていただいた。指定された見学時間を守っていただくことと、必ずマスクを着用していただくことの両方を狙いとした。 ・初等部には、入場券（入場時間帯ごとに色分け）を提示していただき、時間帯ごとに色分けしたカラーシールをマスクの上部（耳の脇）に貼っていただいた。 【生徒の食事について】 ・生徒の食事場所は、準備日は指定した教室（完全入替制）、文化祭当日は大学の大教室とした。いずれも教員の監督下での黙食とした。 【来場者の食事について】 ・例年設営していた第1体育館の飲食スペースは設けず、大学食堂をイートインスペースとした。また、大学キャンパス内店舗の案内掲示を行った。 【その他の感染症対策】 ・慶應義塾保健管理センターの指導の下、感染症対策をとった。 ・各企画団体には、企画考案と併せて感染症対策を考案することを義務とした。 ・準備期間から片付け日までの期間中、実行委員会は消毒グッズを貸し出し、消毒を促すことで感染防止に努めた。 ・文化祭当日は、全ての企画の入口に手指消毒液を配置した。また貸出用端末等の消毒も義務とした。 2.6.文化祭の継承について ・実行委員会では、2019年度以前に遡り、資料整理および更新を行った。Googleドライブ等を積極的に用い、実行委員間、および生徒と文化祭担当教員間の協同作業を行った。 ・図書室で過去の文化祭の記録写真およびパンフレットを自由閲覧できるようにしたことで、企画立案時の発想サポート、校舎使用上の技術継承が可能となった。 ・実行委員会からの各企画への助言には、過去の文化祭で見られた技術も積極的に盛り込んだ。担任や企画顧問も、継承と革新の両方を目指した助言を行った。結果、過去の技術を上手に取り込んだ企画が多く生まれた。 ・文化祭実行委員会企画においては、生徒達の学校への帰属意識を高めること、学年を超えた学内交流を行うことを目指し、実現できていた。				

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
			・文化祭担当教員はこれまでの実行委員会のノウハウの伝達を、実行委員生徒はより活性化および合理化したシステムの構築を行うことができた。 4.5.6. 文化祭Webページについて ・文化祭の様子の一部を外部に向けてオンライン配信した。内容は、2021年度オンライン文化祭のコンテンツ、2022年度文化祭企画の一部、在校生撮影写真、生徒の視点をとった学校生活の動画とした。また、SNSでは、各企画の簡単な紹介および準備期間の写真を配信した。 ・公開期間は、2023年1月10日までとした。 ・2022年度のオンライン文化祭Webページ閲覧者数（本校関係者を含む。同一アカウントからの複数回アクセスは、まとめて1回としている。）は、11/12（土）閲覧者数：1,078、11/13（日）閲覧者数：722、本祭二日間での合計閲覧者数：1,800、公開期間中の全閲覧者数は3,920であった。 ・オンライン配信においては、前年度に引き続き、個人情報漏洩回避と著作権申請を行った。				
教務	1.授業や試験、学期末の特別日程などが円滑に行われるように事務処理を行う。 2.カリキュラムに基づき、教科選択が適正に行われるように環境・手続きを整備し、実施する。 3.生徒の出欠席の状況を管理する。	1. 授業や試験の時間割・使用教室一覧などを作成する。 2. 次年度の5年生第二外国語の希望調査を行なう。 3. 次年度の6年生選択科目・第2外国語の調査を行う。 4. コンピュータ委員会と連携して、電子出席簿の運用を行う。 5. 教室の予約表や備品の管理を行なう。 6. コロナ対応でバスの過密を避けた乗車のため、始業時刻は8:45を継続した。	1. 全学年が6クラスでの教室の運用2年目である。少人数教育推進の一環で、少人数展開の授業も多く、教室稼働率が高い状態である。コロナの感染数の増加時期はあったが、対面授業のみの実施を1年間通して実施した。 2. コロナ禍であったので、昨年に続いて各語種の説明会に代わりオンデマンドのガイダンスを配信して参考にさせた。9月予備調査、1月本調査を実施した。 3. コロナ禍での出欠集計が、欠席事由の増大で複雑になっている。雨天等でのバス遅延が多く、生徒の登校時の負担が増大した。 4. 教室のWeb予約システムは3年目の運用を行った。	1. 年度当初に変更が生じないよう、時間割係・各教科と連携をしていく。分割授業やTTも増え、教室稼働率は、さらに高まった。西校舎1階の小教室を普通教室に改修して、2学期から6年生HR教室とした。それに伴い、南校舎1階が4年生となり、1～3年生の教室配置も変更した。 2. 4年生に対してのガイダンス、希望調査を今年度同様行なう。説明会や講演会が対面にもどりつつあり、生徒と講師の直接対話の機会は増加した。	新カリキュラム（5年生からの第二外国語履修）2年目で定着した。教室利用や試験実施、時間割作成などが円滑に運用できるように継続して努める。昨年の課題であった普通教室の不足を改修により解消し、適正配置を、施設委員会と連携して実現できた。	A	B
コンピュータ	1. 教員と生徒が利用するコンピュータ、タブレットとその周辺機器の管理及び整備。 2. ネットワーク機器の管理及び整備。 3. プロジェクタなどの映像機器の整備及び管理。	1. 授業や校務のオンラン化に必要なサービスを選定、契約するとともに、その利用方法を教員・生徒に周知する。 2. 教員用、生徒用パソコンのリプレースに伴い、機種選定し、スケジュール通りに導入、置き換え作業を行い、9月以降の授業で利用開始できるようにする。	1. 昨年度に続き、半導体不足の影響で物品調達が予定通りに進まず、リプレースが遅延したが、年度内に完了することはできた。 2. 例年通り、ネットワークを安定して運用できた。在宅勤務や在宅学習の基盤として、ネットワークを活用できた。	物価上昇に伴い、情報機器の価格や、委託業者の人件費も上昇している。必要な情報機器の絞り込みや、委託業者の業務を見直すことで、情報関連予算の膨張を抑える。	1. 中等部生・高等部生・教職員全員が、1人1台のパソコンを所有するようになった場合における、校内情報環境の検討。 2. 学校が生徒・教職員に提供するハードウェア、ソフトウェア、クラウドサービスの種類が、ここ数年膨らむ一方であるため、整理する。これにより得られる予算・人員面の余裕を、新しいサービスの提供に振り向ける。	C	B
生徒会	生徒の自治組織としての意識を持たせ、それに見合う活動を行う。身の丈にあった活動になるように指導する。	1.オンライン意見箱を通じて、一般生徒と生徒会本部役員の距離を縮める。 2.感染症対策の緩和に合わせて、行事を従来の形に近づける。	1.新入生歓迎会の代わりとして、前年度と同様、3年目となる「新入生歓迎動画」を作成した。 2.「七夕祭」の企画実施。笹飾りのみだった前年度に加えて、射的とスーパーボールすくい2つのアトラクションを実施し、盛況を博した。 3.応援指導委員会主導による野球応援を実施した。ガイドラインに基づいて、声出しなしであるが、3年ぶりに行うことができた。 4.文化祭が対面形式となったため、文化祭企画「生徒会相談室」を実施した。 5.「正月祭」の企画実施。おみくじの1日実施だった前年度に加えて、羽根つき大会、双六スタンプラリーのアトラクションを実施した。 6.「卒業生を送る会」の企画実施。4年ぶりとなる対面式のθ館（1部）とHRオンライン配信（2部）の2部構成とした。 7. 2023年度の新入生歓迎会を4年ぶりに対面で実施予定。	1.引き続き、本部役員と生徒とのコミュニケーションを活発にし、生徒全体の自治意識を高めていくことが課題。折角のツールである、オンライン意見箱は、残念ながら前年度より活用できたとはいにくい。 2. 2020・2021・2022年度と、引継ぎに難がある中、徐々に各活動が2019年度以前に近づいてきた。2023年度はさらに質を高めて完全に元に戻すことが目標。	2019年度以前に戻すだけではなく、36クラスの新しい規模感に合った生徒会の在り方を模索していく。	A	A

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
図書	生徒たちにとってより利用しやすい図書室を司書の方々と協力して運営する。	図書委員の生徒を中心に、図書室での作業・お勧め図書の紹介などを行ない、開かれた図書室作りをしていく。	1.生徒の興味のありそうな本、司書・教員の視点での読んでほしい本などを積極的に選定し、それぞれ推薦文を書いてもらい、図書室ニュースに掲載した。 2.生徒の図書委員会では文化祭でおすすめの図書の展示やマスコットキャラクターの作成など、趣向を凝らした活動を行ない、文化祭を盛り上げた。	より多くの生徒に利用してもらえる図書室作りを目指していく。	1.増え続ける蔵書の問題を解決し、書籍だけでなく、映像資料のさらなる充実をはかっていきたい。学年間の利用頻度の差をなくしていく方法を考えていきたい。 2.コロナ禍において、大学メディアセンターの利用が減少してしまったので、利用数を増やしていきたい。	B	A
論文実習	学術論文作成に必要な以下の点を理解すること。 1.先行研究が集められ、そこに述べられている見解や主張が整理されていること。 2. 整理した先行研究を「批判的に」見ること。 3. 他者の意見を尊重し、自他を明確に区別する方法を学ぶこと。 4. 論文としての形式や体裁を知る。	1. 2021年度から4単位となり、論文実習Ⅰ・論文実習Ⅱ、各2時間ずつ行う。 ①論文実習Ⅰ(Ⅰ類HRクラス単位でスタッフによる授業を行う) ・4月中は教科書『論文事始』をもとに講義を行い、論文を作成するための姿勢を学ぶ。 ・Ⅰ学期・Ⅱ学期で各1回するプレゼンテーションを通じて、「問」と「仮説」、それを結びつける「アプローチ」の論理性、一貫性を確認する。 ②論文実習Ⅱ(担当者別のクラス。授業は2クラス合同で行う) ・資料収集、プレゼンテーションのレジュメ確認、執筆にあたってのアドバイスなどの個別指導を行う。 ・下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。 ・提出後に作成したパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行う。 2.担当者決定を4月半ばとした。そのため研究案再提出までの間隔を2日程度に短縮した。 3.評価の観点や割合を生徒に示した。	・新制度も2年目となり、概ねフォーマットを固めることができた。 ・論文実習Ⅰ 例年通りに行うことができた。 ・論文実習Ⅱ 論文作成作業・担当者による面談や指導を授業時間内で行うことができ、生徒は作業時間が確保され、教員もより綿密な指導を行えている。 テーマに共通点のある生徒が集まっているので、お互いへのアドバイスなどもできた。 ・早稲田大学本庄高等学院との交流 3年ぶりに相互に生徒を派遣して発表、交流する機会を持つことができた。多少の制限はありながらもコロナ禍前の形に戻すことができた。	1.夏季休業後の下書き提出の時期、方法について2学期のスケジュールも考慮して多少前倒しすることや、classroomを利用した提出を検討する。 2.次のテキスト改訂を視野に入れ、掲載する論文や新たな項目などの構想を立てていく。 3.生徒の「研究ノート」を有効活用できるようにする。 4.他校の取り組みも参考にして、改善すべき点を見つけ、よりよい「論文実習」を目指していく。	長期的には、手法としてフィールドワーク・アンケートなどを取り入れるか否か、Ⅱ類も含めた全員に研究を課すか否か、4・5年時からスタートすることが可能か(例えば論文実習基礎)否かなどについても議論が必要である。	B	A
国際交流	1. Covid19の感染拡大に伴い全面中止になっていた短期留学プログラムのスムーズな再開。 2. 英国 夏Bury プログラムとニュージーランド Kristinプログラムに代わる新たな交流校を見つける。	1.国際交流委員だけではなく、交流先の学校と懇意にしている教員の力を借りて、再開に向けて話し合いを進める。 2.英国とニュージーランドで、新たな交流校候補校をリストアップし、有力候補校を実際に訪問して、交流開始に向けた話し合いを行う。	1.コロナ感染の影響で、今年度もほとんどのプログラムを中止せざるを得なかったが、米国Lawrenceville プログラムと英国Perse プログラムは、何とか再開することができた。カナダのSeaquam 高校とのプログラムについても、再開予定で準備を進めていたが、コロナとは関係のない相手校の特殊事情により、急遽中止となってしまった。 2.ニュージーランドについては、3月末に交流候補校を複数校視察する予定である。2024年の交流開始を目標に、4月以降協議を進めていく。	1.既存の短期留学プログラムを全て再開できるように、交流先と綿密に連絡を取りながら準備を進めていきたい。 2.ニュージーランドKristin プログラムに代わる新たな学校との交流を2024年度にスタートさせたい。 3.英国 夏Bury プログラムに代わる、夏の英国プログラムを新たに立ち上げることを目標に、候補校の選定と視察を実施したい。	1.本校では留学希望者が増加傾向にあるので、そのニーズに応えていけるように、短期留学プログラム をさらに充実させていきたい。 2.現在非英語圏の交流校は韓国のDaewon のみであり、交流国は全て先進国に限られている。今後は非英語圏や後進国にも交流校も持つようにし、本校生徒がSDGsをより意識して、世界の国々が抱える問題について理解を深め、より偏りのない国際感覚を身につけられるようにしていきたい。	C	B
施設	1. 安全を第一として、基本的な施設・設備の充実を常に念頭に置き、計画、整備を実行していく。 2. 引き続き、施設・設備全体の経年による改修事業について、迅速に対応していく。 3. 新型コロナ感染対策として施設、設備を整備する。	1. 第3体育館の雨漏り経過観察。 2. 既存棟に位置する4年生（207～212）ロッカーの改修工事の実施。 3. 第1グラウンドの掲揚塔側ベンチの両端および砂場前のコンクリートベンチ化。 4. その他、引き続き、校内全施設における改修箇所の集約と改修計画および工事の実施。 5.各学年クラス配置の並列化の実現。 6.教員室のスペースの有効的なレイアウトの実施。	1. 第3体育館の雨漏り経過観察。 →特に問題なく経過している。 2. 既存棟に位置する4年生のロッカーの改修工事の実施 →実施できた。 3. 第1グラウンドの掲揚塔側ベンチの両端および砂場前のコンクリートベンチ化。 →無事に工事が実施された。 4. その他、引き続き、校内全施設における改修箇所の集約と改修計画および工事の実施。 →校内各所の再塗装や、共用棟周辺のタイル改修工事が実施された。 5.西校舎（小教室Ⅰ～8、多目的B、C教室）を6年教室化し、旧4年教室（207～212）を2年教室、201～206を1年教室、101～105を多目的教室、旧6年教室（161～166）を4年教室として、全学年の並列化が実現した。 6.教員室スペースの有効的なレイアウトの実施。 →実現した。	1. 第3体育館の雨漏りについては、引き続き経過観察し、問題がある場合は、関係部署と連携し、迅速に対応していく。 2.その他、引き続き、校内全施設における改修箇所の集約と改修計画および工事の実施。	1. 既存の施設も30年を経過し老朽化が進行している。中高、大学管財部、三田管財部など関係部署とも連携をとりながら、優先順位をつけて計画性をもって対応していきたい。 2. 6学年すべてで6クラス揃ったが、もともと教室数が潤沢ではないうえ、カリキュラムが多様化されていく中で、新棟建設、増設等も計画していきたい。	A	A

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
BLS	1. 救助の実践を通して、緊急事態の判断、危機管理、生命の尊厳、市民の義務を根付かせる。 2. 3年以内の再履修で実行能力の低下を防ぐ。 3. ボランティア精神の育成。 4. 教職員の受講率の向上。	1. 指導員の指示に従い技術習得に励む。 2. 講習後、慶應BLS教育の取り組みについて説明にあわせ、校舎内に設置してあるAEDの場所を確認する。	藤沢市消防局、藤沢市救急救命普及推進会の協力もあり、例年通りの実技を実施することができた。ダミーやトレーニング用AED等の機材も充実しており、生徒一人ひとりが時間をかけて実技に臨むことができた。	1. 感染症対策を十分に考慮し、一人でも多くの生徒が実技を受けられるようにしたい。 2. 教職員の受講数を増やすため、学校行事作成の際、教員が受講可能な日程に可能な限り設定をしたい。 3. エピペンの講習が実施できておらず、次年度には出来るようにしたい。	この活動は、続けていくことに意義があり、塾生塾員誰もが、手をさしのべられる環境を目指す。	B	B
年会誌	年会誌発行の期日の円滑化、及び正確さを目標とする。	各担当部署に原稿の速やかな提出をお願いする。行事ごとに原稿の依頼をした。校正は年会誌担任のみならず、各クラス担任・クラブ顧問にも依頼した。	実施できた行事については積極的に記録として残すようにした。コロナ禍以前とは行事の在り方が異なったため、項目の扱いが難しかった。	一昨年、昨年と行事の実施状況が異なったため、写真の依頼、作文の確認等、その都度する必要があった。提出期限を厳守する必要があった。	学年ごとに実施した時期が異なる行事もあったため、編集の仕方を工夫する必要がある。写真の集め方に工夫が必要である。	C	C
クラブ運営	生徒が安全かつ有意義にクラブ活動ができるよう、環境および制度を整備する。	1. 各活動場所における危険箇所を調査し、安全に活動できる活動環境を整備する。 2. 新型コロナウイルス感染症によるクラスター発生防止対策の徹底。 3.熱中症予防などの安全対策。 4. 安全でスムーズなクラブ紹介の実施。 （監督・コーチへ、更なる理解と協力を要請）	1.前年度に続き、厳しい制限付きでのクラブ活動実施 で始まった。新入生の入部については、年度当初に手続きができた。 2.新型コロナウイルス感染症によるクラスター発生防止対策の徹底。 → 感染予防に必要な、消毒用品や衝立の準備、クラブ毎に施設利用の条件をその都度、部長、校医と確認し、感染予防環境の徹底を促進した。 年度後半には、感染者数の減少が顕著になってきたため、屋内外クラブでの規制（マスク着用のタイミングなど）が緩和された。しかし、吹奏楽部や合唱部などについては、引き続き、厳しい規制（マスク着用での活動）が継続された。 3.熱中症予防などの安全対策。 →新型コロナ感染症予防との兼ね合いを含め、各クラブへ周知した。 毎年実施してきた主将主務・監督コーチを対象の熱中症対策講習会については、前年度同様、密の回避や、活動制限によって、発生の可能性が低かった事などを考慮し実施しなかった。 4. 安全でスムーズなクラブ紹介の実施。 → 従来どおりの対面でのクラブ紹介を実施することが難しかったため、前年度同様、Google Classroomでクラブ紹介クラスを作成し、各部がPR活動を行った。 3月には、新型コロナ感染症の状況も落ち着いてきたため、対応策の緩和がされ、「監督・コーチの会」も3年ぶりに実施できた。	1. 来年度以降も、社会情勢に合わせた感染予防対策を講じる必要がある。今年度は顕在化しなかったが、施設不足解消に向けた努力は引き続き行う必要がある。 2. 昨年度まで生徒、教員の負担軽減を目的としたペーパーレス化を推進してきたが、今年度は、あまり検討ができなかったため、来年度はその適応範囲を広げる検討を継続したい。 3. 今年度も熱中症講演会を実施することができなかった。来年度については、必要性を考慮しながら実施したい。 4. 様々な情報の伝達方法について、対面と、オンラインでの実施が、効果的かつ効率的であると考えられるため、今後もこのハイブリッド方式で実施していきたい。	1. 安全性を高める対策については、検討と改善を継続する。 2. 生徒の活動に影響がないように教員負担を軽減する。義塾の「臨時職員制度」を有効活用し普及を促進したい。 3. 電子署名を利用することで、紙の書類を大幅に減らす事を検討すべきである。 4. 活動場所の安全問題について、最も深刻な問題は、グラウンドの過密利用についてである。引き続き、外部施設の確保について強く要望をしていく。	B	B
広報	本校の広報に関わる業務の改良を目指して実施計画・企画・実施・評価・報告をする。	1. 外部団体主催の説明会への参加 2. コロナ禍に対応した学校主催の説明会のスムーズな運営 3. 学校案内リーフレットの活用 4. 再構成版Webサイトの改良と活用 5. 学校紹介ビデオリニューアル版の活用	1. 4/29（祝） 神奈川私立中学相談会 7/18（祝） 神奈川全私学展 7/30（土） JOBA「学校フェア」（オンライン） 2.オンライン開催（一定期間視聴可能なオンデマンド配信）と、オンライン併用の対面開催（mirai compassによる事前申し込み・定員制の校舎見学会）を組み合わせて、以下の日程（@150番教室）で実施した。なお高等部参加者を対象に希望制でオンライン個別相談会を8/23（火）に実施した。 7/9(土) 高のみ午後 7/23(土) 高のみ終日 9/10(土) 中のみ終日 10/15(土) 中のみ午後 10/15(土) 中のみ午後 11/19(土) 中・高午後 3.校舎見学会参加者に対し、各家庭に1部を配布した。 4. 現行カリキュラムの内容に沿った「各教科の紹介文」への変更、形式の統一を目指した「クラブのページ」の改訂を行った。さらに改訂当初からの予定に則って、「在校生・卒業生の声」の追加2名（4年男子全国・6年女子中帰国）の取材を行った。 5. 学校紹介ビデオリニューアル版を今年度から活用を開始した。	1. コロナ禍において中止、縮小された外部団体主催の説明会だが、感染症対策の基本的対処方針の見直しに伴い開催方法の変化が予想される。それらの開催時期や参加の有無によって、学校主催の説明会スケジュールを再検討する必要が生じる可能性がある。 2. 1回当たりの受け入れ人数の増加や生徒スピーチ提示方法の変更を検討する余地はあるが、オンライン併用の対面開催（予約・定員制）で実施する方向で考えたい。 また、感染者数増加という世相を反映してか開催時期の問題なのか明らかではないが、秋以降の見学会出席率が減少傾向にあり、特に文化祭と同時開催ではない11月開催回の出席率は著しく低かった。（中等部86%→86%→76%→55%程度、高等部73%→75%→49%程度） 実施時期や実施回数、申し込み締切り時期と条件設定などの改善・検討が必要であると考えられる。 3. Webサイト内にある学校案内（リーフレット電子版）の併用をSDGsの観点からも意識的に目指す。 4. 学校生活をコロナ禍以前の通常モードに戻して実施していく方向性に伴い、可能であれば写真の差し替えを想定した学校行事毎の撮影を今後依頼したい。 また、現在は「保護者の方へ」から保護者クラスルームへと繋がるが、さくら連絡網への移行に伴う調整等、初等部からの受け入れ完成年度である2024年度以降の生徒募集に向けた資料としての改良を引き続き行う。	本来の学校生活の様子を素材とした資源作りを近い将来行う必要がある。その際には入試形態の変更に配慮しながらも、横浜初等部受け入れ後の教育目標・教育内容を発信し、学校の良さがわかるように学校内外への広報体制を充実させなければいけない。現在見学会時に配付している学校案内リーフレットや見学場所案内など、タブレットやスマートフォンからQRコード読み取りによってアクセスするなど、紙資源の節約を図ることができると同時に、学校案内リーフレット電子版の活用につながる。	A	B

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
				5.リーフレット、Webサイトと同様であるが、2022年度使用開始のため、しばらく現在のものを使用せざるを得ない。			
芸術鑑賞	人生をより豊かなものにするために、質の高い芸術に接する。3年間のローテーション（クラシック音楽→日本の古典芸能→ミュージカル・オペラなど）で、多様なジャンルに接する機会を設けている。今年度はオーケストラ鑑賞教室を実施した。	【オーケストラ鑑賞教室】 実施日時：2023年 2月7日（火） 開場 12：45 開演 13：30 終演 15：30 （休憩1回を含む） 演奏：読売日本交響楽団（指揮：川瀬 賢太郎） 演目： ワーグナー／楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第1幕への前奏曲 ビゼー／組曲「カルメン」から「闘牛士」「前奏曲」「アラゴネーズ」「間奏曲」「ジプシーの踊り」 スメタナ／連作交響詩「わが祖国」から「モルダウ」 ベートーヴェン／交響曲第5番「運命」 会場：東京オペラシティ コンサートホール その他：中高合同で実施	1.今年度のジャンルはクラシック音楽で、オーケストラ鑑賞教室を実施した。読売日本交響楽団に直接依頼をし、指揮者・演奏曲を相談の上決定した。 2.演奏曲は有名なもの、中高生にも聞きやすいものにし、指揮者の川瀬賢太郎さんに曲の解説もしていただいた。知っている曲も多く、指揮者のお話も面白く、好評であった。	1.次年度のジャンルは日本の古典芸能で、歌舞伎鑑賞を予定している。 2.今年度と同様に、2月に中高同日時同プログラムでの開催を目指す。	1.チケットの販売方法や公演内容(歌舞伎やミュージカル)によっては費用が高価な場合がある。3年間で15,000円(年平均5,000円)の予算で行うように調整する。 2.芸術鑑賞会が実施可能な時期は、7月期末試験後または2月入試期間中であるが、今年度は2月に実施し、参加生徒の人数把握や準備など余裕をもって行うことができた。 3.演目の種類によっては、時期が限られるものがあるが、当面は2月の実施を目指す。	A	A
自己点検	教科、委員会が、教育活動の内容について評価する仕組みを設け、本校の教育水準が向上し続ける為の補助的手段を提供する。また、活動内容の重複や効率性の検証材料を提供することで、円滑な学校運営に寄与する事を目的とする。	1.各年度における教科、委員会の活動内容をまとめ総括を行う。 2.各組織の目標設定、活動内容の評価と改善の記録が適切になされているかを確認する。 3.保護者の学校に対する満足度を測るために、有効なアンケート項目を設定する。自己点検で得られた情報を基に、他教科、他委員会相互の情報交換を促す。公表可能な学校評価資料を作成する。	現行の評価方式による作成方法が定着し、スムーズな書類作成で予定が達成された。2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施した。手順としては、保護者世話人の37名に本校ホームページの学校評価一覧をご覧頂き、各教科、委員会の評価が適切に行われているかの設問に4段階評価で回答して頂いた。	1.評価書類作成の内容や作成の仕組みについて、教員の、特に年度末の他業務への影響を考えると現行の方法が最良であると考える。今後も各組織が自己点検・自己評価を材料に議論を促す仕組みを検討していく。年度間の担当者変更の際にも活用していく。 2.保護者から目標設定と結果の数値化を求める意見もあったが、教育活動は必ずしもデータとして目標設定、結果をすることが適切とは言えず、今後も各教科、委員会で記述式の評価と分析を継続していきたい。	文科省「学校評価ガイドライン」平成28年改訂で、小中一貫校における教育目標の設定などについて示されている。横浜初等部との連携の中で、学校評価に関して文科省の指針である義務教育9年間の目標設定に加えて、本校においてはさらに高等部3年間、計12年間の中での段階的な目標設定について議論していく。学校評価が形骸化しないような取り組みは常に必要である。	B	B
1年生旅行	1.富士吉田ホールアース自然学校でのクラストレッキングや洞窟探検、教材を使った物作りのプログラムなどを通して、富士吉田の自然や歴史、文化を学ぶ。 2.また、これらのプログラムによって集団生活のルールを学び、規律ある行動を身につけるとともに、友達と協力して一つのことを成し遂げる力をつける。	1.事前学習として理科の授業で富士山について学ぶ。 2.樹海、紅葉台トレッキングを通して美しい自然景観やそこに息づく動植物などの観察をする。 3.チームビルディングを通して、目標を達成できるようチームで協力し、メンバーのスキルや経験を最大限に活かすことで組織の力が最大化することを体験する。 4.飯盒炊さんを通して、仲間意識を高め、集団の中の自分の役割について学ぶ。	1.コロナ禍で、現地に行っての実施が久しぶりだったが、各プログラム、ホールアースの丁寧な指導のお陰で、無事に遂行することができた。 2.天候の影響で前半組、後半組でプログラム内容が変わったが、それぞれ充実した時間を過ごすことができた。 3.集団生活を通して、うまくいかないこともあったが、自分の役割を認識し、行動しようとする姿が見られた。	1.来年度は、今回の反省を活かし、より良いプログラムになるよう、事前指導の段階から計画的に進めていきたい。 2.食事の面でアレルギー対応の連絡が旅行業者、ホテル、食事場所間でうまく連携できなかったのが、改善する必要がある。	1.6クラス同時に旅行を実施することが最善であると考えている。よって、宿舍の変更、もしくは、目的地の変更を検討することが引き続き必要である。 2.現在の行程で続行していく場合、雨天時の代替プログラムの充実が今後の課題である。	B	B

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
2年生旅行	感染防止対策を踏まえた上で、発熱時に保護者がアクセスしやすい宿泊地としながら、2019年度の旅行にできるだけ近づける行程・編成とした。 1. 東北地方の自然・歴史・文学・風土を学ぶ。 2. 集団行動の意義を理解する。 3. 防災学習・復興支援プログラムに取り組む。 4. 現地の方々との交流を通じて地域文化の豊かさを実感する。	1.1班は月火水、2班は水木金の行程とし、宿泊地を花巻2泊とした。 2.各部屋2～3名の部屋割り、同一方向を向いた黙食、大浴場の利用を控えた。 3.初めて三陸鉄道の震災学習列車に乗車した 4.初めてふるさと遠野村で南部曲がり屋の中で昼食をとった。 5.平泉、遠野、三陸鉄道について事前学習を行った 6.国語科や社会科での学びと見学地をリンクさせる。 7.郷土芸能や郷土料理等を通して郷土文化への理解を深めさせる。 8.各教科で学習した内容に触れさせる見学地や体験プログラムを用意する。	1.2年生にとって、本校での初めての宿泊を伴う学校行事だったため、いろいろと不安があったが、大きな問題はなく、無事に終えることができた。 2.時間厳守、他者の迷惑になるようなことはしない、人の話を聞くといった、集団行動での基本となるようなことを概ね守った上で、仲間との親睦を深めることができた修学旅行となった。 3.事前学習で学んだ平泉、遠野、三陸鉄道を実際に訪れることで、各訪問地に関する理解をより深めることができた。	1.2023年度は3クラス追いかけて、花巻1泊、宮古2泊の形に戻したい。2日目の震災学習列車乗車、3日目に田老地区での震災学習で、さらに有意義な震災学習となることを狙う。それに見合った事前学習も行う。 2.3日目、浄土ヶ浜遊覧船も計画しているが、3クラスでは乗船できないため、乗船と抱き合わせとなるプログラムを検討し、実施したい。 3.2019年度以前のように、津波被害に関する本を夏休みの課題とするか要検討。	すでに震災から10年以上が経過しており、これからの生徒たちは東日本大震災を体験していないことになる。そうした生徒たちへの効果的な震災学習を考えていく必要がある。	C	B
3年生旅行	6月まで広島平和学習として、多面的な角度から学習を行ったが、感染防止対策また発症後の対応を考え山梨・埼玉に変更。 1.富士山麓の自然と文化に触れ、人々の暮らしについて学ぶ。 2.事前学習を授業にて戦時中の様子について学び、平和とは何かを考える期間とする。 3.集団生活を通じて、規範意識を身につける。	平和学習の継続および富士山麓の自然や人々の関わりについて、道徳・総合・国語Ⅰ・社会・理科の授業で以下の事を行なった。 平和学習について 1. 広島平和学習（ワークシート）『平和』とは何か 2.ドキュメント『隠された被爆米兵』の視聴 3.『1945年8月6日』を読んでレポート作成 4.映画『この世界の片隅に』『黒い雨』視聴 山梨、富士山麓について 1, 山岳信仰について 富士山信仰を中心に日本人の「山」に対する思い、伝承など民俗学的見地から事前学習を行った。山岳信仰については来年度北陸旅行につなげる形で立山信仰なども扱った。 2. 富士山周辺の植生・青木ヶ原樹海について、富士山周辺の気象について、3年間の理科2の内容と結びつけて学習した。	広島四国方面には行けなかったが、2泊3日で中部入学後初の山梨・埼玉の宿泊研修旅行を実施できた。 1.朝霧高原にある牧場を訪れ、乳しぼりやバター作りなどの酪農体験、また命をいただく大切さを学んだ。 2.山梨の郷土料理である『ほうとう』作りを体験 3.晴れコースでは、樹海探検で自然に触れ、雨コースではチームビルディングを通してゲームを楽しむことができた。 4.平和教育も研修最終日に『埼玉ピースミュージアム』を訪れ国民学校での道徳授業、防空壕など戦時中の体験をすることができた。	1.今年度は、急な場所変更ということで、平和学習の事前学習があまりとれず、各教科の協力で変更プログラムにあわせて実施した。 2.来年度は広島四国旅行に戻し、十分な事前学習をおこない、原爆投下された広島を訪れ『平和』について五感で感じてもらいたい。	1.広島旅行Aプラン、Bプランのように枠組みを準備し、旅行の主旨に重きを置きつつ、どちらかは実施できるような平行案を用意し、実施できるように尽力する。 2.本年度は広島以外のプランも同時に準備、結果2泊3日の近距離（富士周辺散策）プランを実施。 3.今後は3泊4日2グループでの広島・四国旅行プランを実施する予定。2班編成での広島・四国旅行未だ実現できていないので、旅行社とも相談の上しっかり綿密な準備を進めていく。	B	B
4年生旅行	1.北陸を軸とした中部地方の各地を地学・地理学・民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶ。 2.事前学習と現地での見学を総合し、自発的に探究する。 3.集団生活を通して、協調性や規律性を身につける。	2019年度までは高山泊を含む3泊4日で実施していたが、新型コロナウイルス対策などを考慮し、宇奈月温泉と金沢市内泊の2泊3日に代える。 ・事前学習 1.特別カリキュラム期間中に地学・地理学的な視点で授業をおこなう。 2.期間を短縮するため、金沢の宿泊施設で行っていた「石川の工芸」「石川の食」「石川の歴史・文化」講演は、出発前にオンライン開講とする。 ・事後学習 1.事前学習と現地での見学を総合したレポートを作成する。内容は、各自が設定したリサーチクエスションに沿ったものとする。	2泊3日に短縮したものの、意義深い内容に仕上げた。団体旅行としては、中学第1年の富士吉田自然学校以来であったが、集団行動も班別自主研修も滞りなく活動できた。 【事前学習からつながる現地見学地】 1.『フォッサマグナミュージアム』および『立山カルデラ砂防博物館』を訪れ、地理学・地学的な理解を深めた。 2.『白川郷』『妙立寺』『兼六園』を訪れることで、民俗学的な理解を深めた。	1.新型コロナウイルス対策の終了に伴い、2019年度までの3泊4日の旅行を中心とした総合学習を立案したい。 2.引き続き、事前学習も含めて、北陸を軸とした中部地方の各地を地学・地理学・民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶことを考えている。	基本的に4年生の事前事後学習も含む旅行内容は完成度が高いと考えているものの、現行の目的にとらわれず、宿泊地や見学地の検討は継続していく。	B	B

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
5年生旅行	歴史の深い京都・奈良は、グローバル・シチズンとして一度は訪れるべき場所である。事前学習も含め、その史跡や文化財に触れることは有意義なことであると考え、今年は京都に1泊、奈良に1泊の2泊3日での旅行を計画した。判別自主研修によって、仲間との協調性や自主独立の精神を養うことを目的とした。	全て班別の自主研修とした。 1.事前に旅程を各班で検討、提出させた。 2.自主研修の内容にSDG'sと関わる内容を含めることを条件とした。	1.けが人や病人が数名出たが、大きな事故なく終えることができた。 2.初めての修学旅行の生徒も多く、集団行動がで きるのか、かなり心配したが、集合時間などに 間に合わない生徒はほとんどおらず、滞りなく すめることができた。 3.事前に何度も伝えたにもかかわらず、旅行会社によるアレルギー対応が遅く、かなり気をつかった。	1.滞在中の活動が連日班別自主行動となるため、生徒各個人の興味や事前・事後学習と結びつきにくいのが現状である。 2.今回は2泊3日の短縮旅行とし、4日目の長谷寺方面を、あきらめたため、3日間の全てが自主研修となった。 3.自主的に場所を選び、計画をたてて自分たちで動く良さもあるが、高校生があまり興味をもたないところに行くことも検討すると良いか。	自主研修が主流のプログラムではあるので、他の場所を検討し、京都・奈良旅行を6年生にするのも良いか。	B	B
6年生旅行	1.従来の北海道旅行の代替として、旅行実施の10月に新型コロナ感染拡大が完全収束していない状況でも、実施できることを最低条件として、2泊3日の京都旅行とする。 2.京都選定の理由は、まず、歴史・文化・現代社会的観点から学べるのが豊富であることである。5年生と重複するが、別行程で実施することとした。加えて、今年度限定の理由としては、コロナ収束を見通して全国的に修学旅行が急増する中、宿泊場所が比較的容易に確保できること。2泊に止め押さえたのは、旅行中に体調不良の生徒が出た場合にも（重篤でない場合は）、全体の旅程に影響が出ないようにとの理由である。 3.本来は「総合的な探究の時間」としての旅行なので、授業での学びとの関連性、事前事後学習とリンクさせての総合的な学びを目標とするものだが、コロナ禍で始まり、2年半の学校生活で制限、我慢を余儀なくされてきた6年生が「全員元気に行って帰る」「みんなで楽しい時間を過ごす」ことができることを目標とする。さらに、ただ行っただけにならないよう、Googleを活用して短時間でも訪問地についての学びの成立を目指した。	1.従来の5年次の京都・奈良旅行はほぼ完全班別自主研修であるが、6年生は選択科目別の授業が多く、クラス単位で行動したいという意見も生徒から出たので、クラス毎の見学と判別自主研修の組み合わせとした。 2.「京都・奈良旅行」と銘打っているが、バス移動で時間が効率的に使える利点を活かし、初日に奈良東大寺まで足を延ばし、その他は京都で過ごす。3日目のクラス別研修は、生徒だけでは行かなさそう、かつ交通が不便な比叡山延暦寺、高山寺、貴船神社などを選定した。 3.新しい試みとして、従来の紙のしおりをやめてデジタルしおりを導入し、Google Form を活用した事前学習・事後学習・行程中の体温調査なども実施した。BYOD（スマートフォンなど）で、行程中でも有意義な活用をはかった。 4.1名の生徒が発熱し、最終日朝に離団する事例が出たが、教員、部長（現地）、校医（オンライン）で対応にあたり、保護者も適切に対応してくださった。	1.総合的に充実し、貴重な旅行になった。生徒が各自責任をもって感染予防対策を旅行前、旅行中にしっかりできた。 2.4泊の北海道から2泊の京都への変更で、旅行概要を発表した際は落胆の声も聞こえたが、旅行中・旅行後の生徒の様子からは満足度は高かったように思う。 3.事前事後学習は、Google Form などを活用し、例年と比べて生徒の負担が少ないもの（オンラインクイズやスライドショー作成）を設定した。本旅程は日本の中学3年生の典型的な修学旅行旅程とほぼ同じであるが、6年生であれば（従来の5年生よりも）多くのモノ・コトを見て深く広く考察できることが分かった。 3.デジタルしおりについては賛否両論であった。 4.1名の生徒が発熱し、最終日朝に離団する事例が出たが、教員、部長（現地）、校医（オンライン）で対応にあたり、保護者も適切に対応してくださった。 ・反省点 1.前にかかなり注意していたにもかかわらず、1名の生徒に生食物アレルギー反応が出た。 2.3年ぶりの旅行実施ということを考慮しても、旅行社の対応に不満が残る。事前のホテルや新幹線情報が遅く、校内での準備は振り回された。アレルギー対応についても、現地調理場との綿密な連携があれば防げたはずである。さらに旅行費用の精算についてのミスにより一部保護者にご迷惑をおかけした。	「総合的な探究の時間」としての旅行にどのような課題を設定し、評価していくか継続して検討する必要がある。最終学年として深い学びを期待したいが、限られた日数での都市中心の訪問では、事前学習→訪問→事後学習で「北海道」らしさを学ぶには限界を感じる。 1.台風の影響を受けやすい時期であるため、現状でサイクリングの日程の所のみ雨天プランを用意しているが、他の日程でもある程度は考慮する必要がある。 2.2020年4月に改修終えたアイヌ関連施設「ウポポイ（民族共生象徴空間）」が利用可能である。HPを見ても充実した内容が期待できる。改修期間中に暫定的に訪問していた昭和新山・有珠山コースは評価が高いが、長距離移動を考えると、ウポポイを優先的に、行程を組むことになろう。 3.例年札幌自主研修では、札幌のみのコースと札幌＋小樽コースの2つから選択させているが、ここ数年は札幌コース選択がゼロまたは1班である。教員配置の点からも、次年度からは札幌＋小樽コースのみを提案する。 4.サイクリングでは自転車の交通マナーをより徹底させる必要がある。 5.体験学習は、解説も含めて効果が高いので次年度も実施をしたい。 6.函館山の夜景はインバウンド需要が回復すると大混雑が予想され、その対応が必要である。 2021度を実施した旅行の代替案としての「卒業生による講演会（複数講師）」については、生徒たちからも前向きな感想を聞くことができ、一部の生徒たちは個別に連絡をとってさらに話を深掘するなど積極的な態度を確認することができた。時期・人材確保の課題が解消できれば、今後も実施していく価値の十分ある総合学習であると考えている。特別カリキュラム時期の実施についても検討していきたい。	1.最終学年の総合的学習の集大成としては旅行先の再検討が必要である。北海道の主要都市の観光が中心の現状では、北海道の自然や文化を学ぶ機会が少ないばかりか、社会系の学習課題も実は他学年と比較しても設定が難しい。行先を北海道で継続する場合でも、行程の大幅な変更を考えてはどうか。バス移動が長く、時間に大幅なロスがあることは懸念材料であるが、以前の道東方面など自然科学系の学習に主眼においたコースの復活も検討したい。 2.第二外国語カリキュラム語学習得を目的とする旅行が実施されれば、1学年全員で1カ所を訪問するという形式そのものも検討していくことになる。 3.1週間授業を止めてまで実施する価値のあるものなのか、特に6年2学期という大切な時期が適当なのか、教員・生徒・保護者に意義が共有できるような行事として継続できるのか、今後も検討を続けて欲しい。	A	A